源氏目案 上

特別
12
4435
26

門 へ12
號 4435
巻 26

昭和三十年
九月二六日
購求

帝國圖書館藏

序文はげにはりるくのうしい
りをきき、筆を筆のうへ中
うつし、これをふさ
ぬいくもしたくてるく。
くくのうしよ。そのげいよく光
ます。我國の寶と、源氏物語よ
さくういるくべし。これよりてせ
くのりてあそびゆてうりて、花鳥
の情をあらう。家くの往釋ゆう
まちぶして、雪堂の功をつむとて
ごとはげしの善成の河海物いふ
しへ今をうむじくへ、ふさいさを
うてり。かてもおかしれよるひ
て、物語の道をえらん。ふるあまど
筆の海よりとるがりて、あくをりれた
ろ奥をうり、河の柿よりてくいぶ成

まりの発よりのこゝろなひろひ
あやまちはゝ〳〵もむかしの先達のこゝ
さしをまうされい後生のもぐ〳〵なん
ぜまさえばゝんやつゝよ愚眼を
とゝめあをを著云にのごて著る餘
情〳〵名づくるこゝろまうるなり
宇治のち納云物語云今ハむかし盛
前守為時ゝこゝさゝのまゝ世よめでゝく
やゝ〳〵りけゝんいひゝさゝれ式ゝ
やゝこの為時源氏いけゝるゝ
こゝのゝるこゝもゝもゝむゝとゝれ
ゝけゝこゝさゝのゝよゝこゝ
こゝて むゝとゝ成めゝいゝゝたりけゝ
源氏つゝるゝこゝゝさゝゝぐゝよゝつゝ
ゝりゝまゝりてのゝつゝるゝゝゝもゝ
いゝゝまゝゝゝゝん

一頃法院御記長元二年一切物語雖多或有
或記宴之伊勢物語ハ詞花宴ゝ
先上手ゝ詞殊勝ゝ大和ハ在下ゝ
其外ゝ何物語盡ゝ見ゝ其ハ
故ゝ源氏物語ハ可説物ゝ更非俊
之処為業ゝ書之始一條院有御
説ゝ不可説物ゝ式ハ日本記
くゝゝゝれゝ在作于取左傳
内侍始ゝ論言号日本記御局云誠
諸道諸藝皆縮二篇不可説未曾
有下説源氏哥ハ芳ゝ狭衣哥ゝ
けゝゝゝ云人ありゝ云此条心浮淺猿
宴ゝ更非同日論議狭衣哥ゝ
不思ハゝゝゝ源氏哥ゝ不可及
雲泥ゝ凡哥道ハ知ゝ不知水火者ゝ
源氏ハ才ゝゝハ詞つゝ非人ゝ処為不

可説哉。才二哥者歟。是又何人哉
之才三作根。沙汰云盡優美色
之哉もいつべし。但未見哥又不奇
説。但是ハ我朝宮上。詞ハ東北人
之処為物。未知子細之奉不可説
悲凡古今。後撰為大意時ハ則一条
院ひとつ。ゆゑ兆書通の物歟
一河海序云。光源氏ハ寛弘一条院のこと
出ゐて。康和堀川院のとき
て略す
同物よ云。ひりのうつりのおこり。法ば
いつしかも。西宮の左大臣。安和二年
左宰相中將よ左遷とそれ給しこと
後或ア。おくるくしらるるとなりて。お
りひるけさけつ。大弁殿撰子内親王村上女十宮
しり上東門院へ。ひづくるるるるみ

やとつるとこ。ひづねやとを結けるようつ
かけとり花の去物ハ。ひとをいるるれるとこ
めぐしくつりいづくてそまつべ
きこと。或ア。おのをとれるれば。ゆ
幸よ通ひして。このとこ成いのアに
ゆつしも八月十四夜の月。明れまう
つり。心のとこつるとうゆた。物ゆうる
風情宴にうひけるを。ものとれるさ
きよとて。仏前ア。ありけつ。般若の
彩紙を本とるよア
わしのあ美とうけて。まづとは
ようて。ひ月のまこ。ものうさでめり。是ア
ありけりやとおぼしそとけるる。
後よ罪障懺悔のるに。般ア一ア云
百善をとつつかて奉納しけ。
ほのにかのこまにありもえ。光源氏を

たたかひよるぞ〳〵。世のよ成。或ひが多
よりて。周公旦白居易のいめ〳〵成
かんぐ。在納言菅丞相のよりて。
てうさつぐ。けうのうべ。そのら浮世
よ云加て。五十てはよりて。なりし
城。行大納言行成よりて。ちさと
出て。弁宮へまゐ〳〵。とれけるよ。
寺入道関白。奥書とかれて云。はは
源。世間或ひが。他とのゝ。ありつゝ。老法
爺をかゝ。こゝ。つゝ云。誠よ云たる
交。仁義の道。好色の媒。善悪の縁よ
いろまで。見そのとびゝ。いろ〳〵。
世とゝもしさ。荘子乃。高言よ。なるべき
もれ。詞の妖艶さ。こゝに。はる。
アのまよ。世上の変。ともゝ。れてゝ。
ぐたく。あよ。宿或ひのゝ。をいゝ。

世或ひや号ゝ。れけり。一説云。宿
乃名出ゝ。ゝて。婦よ。宿の。宮のゆ
ゝよ。世のゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
或説云。一条院のゝ。めゝ。ゝ。
門院へまゐ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝて。我ゆゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ひゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ぐゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
一物語の取代。醍醐。朱雀。村上三代よ。雀
ゝ。欲。桐壺。ゝ。門。延喜。朱雀院。天慶
冷泉院。天暦。光源氏。西宮左大臣。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
一照宣云。の母。貫平法皇乃。皇女。延喜の
帝のゝ。妹。ゝ。授仕。左大臣の母。桐壺。ゝ。門の
一。ゝ。後。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
云。ゝ。前の。進授。誠。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

以相伝、光源氏をしのぐ、されば
西宮左大臣よ准ずる歟、一世の源氏た
るべきの法い相同し、但し、始色の
先達ないけるてさ、ばくるや、今の
相伝、孫よ世道とむらしう歟、答曰、
つゝり相伝のうゝ、大綱い甚人のもも
うげあるべきと、行法よ、さ、てふあるべ
ちよしらくにかれを換ちとうしと色法
朝の書、精春秋史記るべいふ実録な
めゝ有実同歟

一桐壺帝、冷泉院を、延喜、天暦よりのどゝ
をるべゝ、或ハ唐の玄宗のゆうさ、
どいさ、或い秦始皇のうくれゝう例を
うちう、又天慶ハ門い相續の皇胤ち
りゆうわゞも、ハ、めゝゞらゝ、業隆
後のれる今上、冷泉院の以後ふ

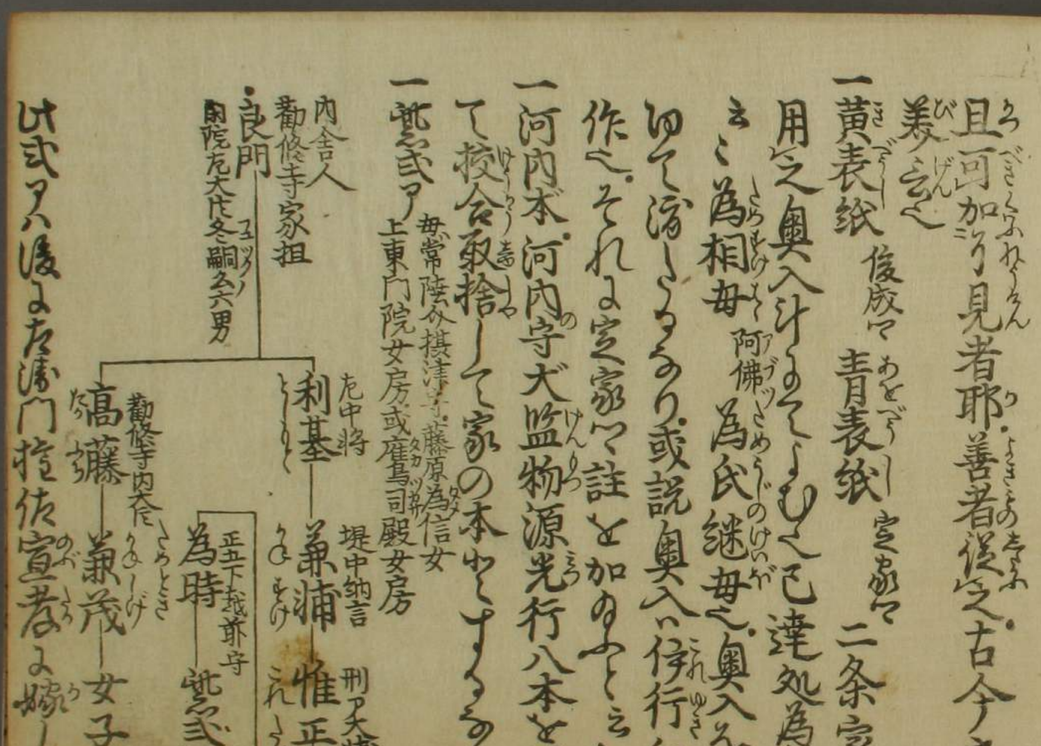
或説曰、条有作者意趣歟、光源氏とも安和の左府
よ比ゝとハ、ゞも、始色のうさいるれ光
けるうゝ有よ、世中ゆの風ともれして、
五條、二条の后を、藤壺の女院、朧月
夜の尚侍、うゝ、或いうゝのゆ將
のそゝりをあり、又左上天皇の
るる号も、源家よいたゝの回躅本
朝よい甚ふ、壁王子ふ先蹤を換ちう
歟、是作相伝の習ゝ、ゝ明ゝ書ハ、ゞ
れ時ハうゝて、ゝ、ハ、ゞ
ハ殿ゝ、ゝ、言下よい延喜の時ゝ云
ハとふくゝり、ハ外或ゝ桓武一条院
と桐壺れ門よ准じ、又内大臣伊周
云を、光源氏よ擬ゝ、一義も
ゝ歟、皆以謬説ゝ、岩桓武ハ、ゝ、其
以後の帝王陽成、ゝ多、延喜のれ名

物語よりは二条院をはじめ延喜天暦
五代のすゑ〳〵はいまの世〳〵
はるか千年によすがあるべし千校つれのつ
ゆ。あま人朱雀院はこの世をいとはしの聖主
世をいとはしの聖主。一条院まで有生とぞ。
又法会の美〳〵しさ。朱雀院を当代岩
由哉之〳〵無其論尊

一此物語作本一やうにぶり狩行殿
御自筆の本も。悉今世に伝つ
べし。源光行は八本をもとして校合取捨
きて。家本。冷泉中納言朝隆本。堀河左大臣後
本。房本（号黄表紙 左大臣条伝）後一位藤原の本（土御門右大臣安 号三条摂政殿）
法性寺関白本（号尚侍殿本）五条三位
後成本。京極中納言定家本（号青表紙）等
〳〵各雖違本皆有異同。れ萬合古本

且可加り見者耶。善者従之。古今之
美〳〵

一黄表紙 後成〻 青表紙 定家〻 二条家
用之奥入汁〳〵もつて已達処為〻
〻為相母 阿佛〻 為氏継母〻奥入を
ゆて浴〳〵るの。或説奥入侍行〻
作〻。それは定家〻註を加のてこと
一河内本。河内守大監物源光行八本を以
て校合取捨〻て家の本やすゝるの
一紙之式〻 母常陸介藤原為信女 上東門院女房或雅号司殿女房



て、大貳三位弁の局（按衣作者なり）とぞ。旧説
ハ正親町以南京極西頬今東小院向之
氏院い上東門院れ処之治之文式ア墓亦
也雲林院白毫院南小野皇墓是
西なり

一源氏とゝろしに少をゝしてゝ盛者
必衰の心と守りて可見悪ゝ
ハ姑色のゝしにいとばしにかゝふく
なゝよ源氏とゝ紙なゝして可見ゝ
一九五十ゝ帖の巻ゝよゝのゝあり一ゝの
詞をとゝ二ゝの所とゝり三ゝ何ゝ
哥ゝの二とゝり四ゝ五ゝ哥しも詞ゝ
ゝもゝゝゝ紙名ゝとり天台の教ゝ
ゝ諦法門ゝ二ゝの有門二ゝの空門三
ゝの亦有亦空門四ゝの非有非空門
也一切の云教い世ゝ諦ゝ出ゝ

ゝりて故ゝ諦の外別立法性ゝも尽ゝり
真實の道理ハ言教のゝしにゝるゝ
りれゝり

一巻ゝ桐壷　何を名ゝとり

桐壷ハ淋景舎也ゝ耶曹司ゝゝし
ゝりて光源氏の母陪息所を桐壷
更衣ゝふ仮巻ゝ名ゝゝり一名壺前
栽討ゝは末の壺前栽の盛也ゝ云

二巻ゝ帚木　うゝを名ゝとり

けゝゝゝ心をゝゝでその家の道ゝ云
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
并一空蟬　縦のゝゝゝ哥を名ゝとり
空蟬のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
巻ゝの并のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の并春日祭又弁五吹上巻ゝ等

祭使(サイシ)菊宴(キクノエン) などいへり。隠(かく)れの巻なり

又並一帖あり。此(これ)等の例(れい)歟(か)。凡(およそ)並(ならび)横(よこ)の様(やう)一偏(へん)に同時のことをいふにはあらず。是(これ)縦(たて)有(あり)歟(か)同時ごとをかくるもまた是を縦並(たてのならび)と云。又空蝉(うつせみ)の巻は是なり。うつせみ隠(かく)れは横(よこ)也。末摘(すゑつむ)は縦横(たてよこ)あればなり

並二 夕顔(ゆふがほ) 縦(たて)のならびに并と詞とを名にとり

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕がほの花

三 若紫(わかむらさき) 哥を名とせり。若紫とつゞきたる

詞ハとらず

手につみていつしかも見む紫のねにかよひける野べの若草

並 末摘花(すゑつむはな) 横縦(よこたて)のならびに哥を名にとり

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖にふれけむ

四 紅葉賀(もみぢのが) 詞を名にとり

此巻(まき)は紅葉賀とつゞきたる詞はなし。花のえんの巻よりは紅葉賀と有り。藤裏葉(ふぢのうらば)の巻にも又

五 花宴(はなのえん) 詞を名にとり

南殿(なんでん)のさくらのえんをせさせ給ふ

六 葵(あふひ) うたを名にとり

はかなしや人のかざせるあふひゆへ神(かみ)の許(ゆるし)のけふを待ける

七 賢木(さかき) 哥と詞を名にとり

神垣はしるしの杉(すぎ)もなきものをいかにまがへて折れるさかきぞ

八 花散里(はなちるさと) 哥を名にとり

橘の香をなつかしみ時鳥花ちる

さゝ波ゆゑてぜうふ

九次广　哥と句とをなゝとり

わしまのうのはまのなかやもいるのんひよ

のうしべ志ゆくゝゝ

十四石　哥と句とをなゝとり

あげさつ四ろの浦よ釣舟のゝつや

やしんをおりひやふるか

十一凄凉　うゝあばをなゝとり

うゝばづくゝゝうゝ

めづらあひひゝゝ哥や句をなゝとり

并一業出　撰のあびゝ哥や句をなゝとり

見ゆゝも我ゝゝゝゝあみちもゝくふさ

ゝもゝざれもゝのゝ句を

并二関屋　絵のあびゝ句をなゝとり

関屋ゝりばゝゝゝゝゝゝ出ゝゝゝゝひすば

たゝもゝり

十二絵会　句をなゝとり

山巻に絵会ゝ句ゝゝゝゝゝ詞ゝゝゝ

出ゝゝゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

句ゝゝ絵拾遺集ゝ句ゝ

絵会の夏ゝゝゝゝ

十三杜鵑　哥や句をなゝとり

為ゝゝゝて独ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝに

みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

十四落雲　うゝをなゝとり

八日ゝゝ峯よゝゝゝゝゝゝゝ落ゝゝ地

ゝゝゝ他よゝゝゝゝゝゝゝ

十五槿　哥ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ槿の芝ゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

十六七女　うゝや句をなゝとり

山女魚も祢さびぬ〜て清神ふるき
世のもゝしへのまで
十七玉鬘　哥とゝんとゝり
ゝゝゝゝゝ為いそれるまでゐゝゝの
なゝすゝと為ゐゝさぬゝん
并一初音　縦のゝびく哥と句とゝゝとり
夏月と松よひゝれてゝゝゝよゝゝ鶯の
ゝゝゐゝさゝとよ
并二胡蝶　縦のゝびく哥や句とゝゝとり
ゝゝぞのゝゝゝふとゝゝやゝさゝゝまし秋
ゝゝつ出いゝゝくゝゝゝゝん
并三蛍　縦のゝびく哥や句とゝゝとり
色いとぞ為とのゝゝこゝひゝゝゝよ
つゝゝゝゝゝりひゝゝゝゝめ
并四常夏　縦のゝびく哥や句とゝゝとり
ゝぞゝゝこのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝと

この〜〜ねとゝんやゝゝゐゐん
并五篝火　縦のゝびく哥や句とゝゝとり
篝ゝゝよゝゝゝゝふゝゝのゝゝゝゝゝゝゝ世ゝゝ
ゝしとあゝのほぬゝゝれ
并六螢　縦のゝびく句とゝゝとり
ゝゝゝゝ何のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
并七御幸　縦のゝびく哥とゝゝとり
ゝゝゝゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
并八蘭　縦のゝびく哥と句とゝゝとり
おゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
并九桔梗　縦のゝびく哥とゝゝとり
或ゝ拾ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

十八 梅枝（むめがえ） 詞をもつてなづく 弁少将拍子うちて梅が枝いだしたる
いとをかしくあり

十九 藤裏葉（ふぢのうらば） 詞をもつてなづく
藤のうらばのうらとけてのことば

二十 若菜（わかな）上下 哥と詞をもつてなづく 或
は上下巻ともいふなり
一 小松（こまつ）原すゑのよはひにひかれてや
のべのわかなもとしをつむべき

廿一 柏木（かしはぎ） 哥と詞をもつてなづく
柏木に葉もりの神はまさずとも人
ならすべき宿の木末（こずゑ）か

廿二 横笛（よこぶえ） 哥をもつてなづく
よこ笛のしらべはことにかはらぬを
むなしくなりしねこそつきせね

並 鈴虫（すゞむし） 鈴虫のこゑ 哥と詞をもつてなづく
おほかたの秋をばうしとしりにしを
ふりすてがたき鈴虫のこゑ

廿三 夕霧（ゆふぎり） 哥をもつてなづく
山ざとのあはれ（われ）をそふる夕霧にたち
いでん空もなき心ちして

廿四 御法（みのり） 哥をもつてなづく
たえぬべきみのりながらぞたのまるゝ世
ゝにとむすぶ中のちぎりを

廿五 幻（まぼろし） 哥をもつてなづく
大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ
玉の行衛しらせよ

廿六 雲隠（くもがくれ）
此巻は名のみありて詞はなし
匂宮の巻に。ひかりかくれ給ひし後
といへるを見て書る歟。雲がくれ逝去（せいきよ）
をいふこと。万葉神亀六年。

九大臣・長屋王賜死之後作哥
太皇のことかしこまりあはれ
ぬるかのあるねぐ事ぐれまし
世外不可勝計一帝末の差よ六条院
世後そひき結ぶ二三年ばりさ
がの涙よ源氏志へる由ってた
まぐ比差の中よ二三年源氏志
のひてそのら崩ぬ後変を
比差よ何ぐべきぐ抑差
のえだりまそ何とこめしき天
紙のを数の法門と例よ引れど
ゐ紙抱ごとさゆらーゆるゆる成法
鳥よくうくきるーー結ぐ比差う
八九年の変こうのられるうり
廿七白宮 何とえぐとり或い白学ゐ
廿一名 薨中将世 例世人有名ゐ

廿二中納言ゆゆゆうーいひつけてとのり
廿一紅梅 紙の廿し詞をえんとせうゆめま
ゆ彩ぐき紅梅世ーーあはいとゆーーわとゆう
廿二作河 橋のうーいくとき白い紙く
哥と何ゐ成ゐとり
作河のうーうち出ーー一畑ーーひうき
心のそこい志りきや
廿八橋姫 十帖 哥をゐとり
そ姫のゆをとくくたりをけすを
けの新くに神ぐぬまめる
廿九椎本 哥をゐとり
志くくんうけしおれーー椎ぐ本ゆる
しき家よなりにけるかれ
三十角総 哥中何と成ゐとり
けげまのさにものぐに紫うと結ひこ
ものぐーゆよりもけるん

卅一 早蕨（さわらび） うたと詞をとれり
この巻ハ阿闍梨のもとより中の君へのかきミにはへる峯のさわらび

卅二 寄木（やどりぎ） 哥をとれり 或ハ名白鳥（あやう）
やどり木と思ひ出ずば木のもとの旅ねもいかにさびしからまし

卅三 東屋（あづまや） 哥をとれり
さしとむるむぐらやしげき東屋のあまりほどふる雨そゝきかな

卅四 浮舟（うきふね） 哥をとれり
たちばなの小嶋（こじま）ハ色もかはらじをこのうき舟ぞゆくゑしられぬ

卅五 蜻蛉（かげろふ） 哥と詞をとれり
ありとみて手にハとられず見れバ又ゆくゑもしらず消しかげろふ 蜻蛉

卅六 手習（てならひ） 詞を名とせり
てならひといふことばハ巻中にあり

卅七 夢浮橋（ゆめのうきはし）
紫式部云 此巻の名ハ哥にも詞にも見えざる事也 一ツ名目なるよし
料簡（れうけん）してもちゐる歟しかりね
うきよハ古哥の詞よ世の中ハ
夢のわたりのうき橋かとうちわたりつゝ物をこそ思へとよめるによりて
その子細河海抄（かかいせう）にいへり 或ハ巻（さうし）の終（をはり）なり
手習（てならひ）の巻の終り
とばかりもうちゝんゆめのたえまよ
もおそれとぞ思ふへんとするやうの
うき世の中のことにかくれたるを
ゆめのうきはしといふなりと云

源氏目案巻第一

い

一いつまのいれ物よう　式数端の辞甚深く先作者とゝ

一いとさくなりよのあるまうばこ鳥田

一いとかくなりよのあるまうばこ

一いとけうさ　心もやるさ　いづゝ

雅

一いとけうさ　幼

一いとけうさ　聊

一いとけうさ　雲花

上人ゝ男女たよ　昇殿の人とゞ

云

一いとも加こさ　完

一いまこと　今　将

一いせつゝゆさに　伊勢集　巻之四　伊

一いとくんがつゞと

巻之四　えゝ

一いとけうさ　早　勝

一いさあ　謙

一いとけうさ　つゝさ　心

一いとけうさ　ほゝけうさ　文　面よ

つまゝゆゝべし

一いとけうさ　一いとけうさ　巻

禁制の心

一いとく　いよくの心

一いとけうさ　ほゝけうさ　文　面よ

つまゝゆゝべし

一いとけうさ　一いとけうさ　巻

一いとかくなりよのあるまうばこ鳥田

一いとけうさ　心もやるさ　いづゝ

雅

一いとけうさ　幼

一いとけうさ　聊

上人ゝ男女たよ　昇殿の人とゞ

云

一いとも加こさ　完

一いまこと　今　将

一いせつゝゆさに　伊勢集　巻之四　伊

一いとくんがつゞと

巻之四　えゝ

一めでたくまつり　奉将軍
一ねうちあり　いとること　長高大
ちゆーて　地元の弥く
一いしーしーく　侍みく
一世　いこれるさ　いこけるさこい　僻変く
いかれかさこいふべー　為家の説
神ゆくゆひこい　加藤の冠人よのあふ
ふりてく　契心心こく　義勝の白女を
源氏よいこひぶしにこの心く
一いこひ　艶　一　五音いつ　むいち
ここみべー　一　いとるこ　瑞光
一池の心ひろく　池　池底く
一いひけれゆ　世よこんこくたの
わまれるくを　世上よいひけつ
あこひく
一ここの紙ゆこる文　青い色書り

一いこる　優うる也　三東
一いまくこまれまもこ　三東
唯一心万法唯識の心く
一ひこそーいくくふ心く　言殺いひ
こひこひこ心ゆこり
一ひーこひ　まよいひこる極く引
こふるいこと
一ひこひ　ねもくこ　馬乃ゲ　靴よ女
と遠ざこりて後い宝ここ　妻ゆこく
いまめこる物の声　経も
くーこりつくこ
らひ今根よりひーこいろこーか
ここ
一いこや　ふこく　一いよのか　伊与守
とかやいつる夏　長宦も次宦も職

掌ハ和ゐのごさ友之。諸國母國特と
外長宮の夏と執行と故よかよい
して。寺と外ちも立つり
一いもうと　系脈ふいわ。あてもあ也。
女とど。男のまよかくしたた今の
様よすとの。天照れ神れ
このこいつり一いぐさるりげ
人のねごんとなえ
一いづく　俗よぶりやと立
一いむ　尼ごこふ夏
一いづくびいまけよりり　京嬢のまけ
ちうべー
一いらのゆげも　伊勢外仏よあるけ
王面白書ちとり
一いとのくいちのさるり
一いむこのまうー　受戒まうち也

一いさぶとんをさそあり
一いさう月やとふりー十六夜也。
さいこもの外の鶴よやもい
て出ち赤くげへ
一いあーへもいすーへよもあちーごさ
とれ歳也　一いめうりのいな
めうりれちくこいわちり
一いされりー（小茶之様ちく）
一いへくー　鶴　本草云頭短須色
一いくーう　心いくさ
一いめき　大久昔ハ女子とあてぐさ
ぐさ。ちうぐさうこいり
一いめう十日　去孔十日
一いこけるさ　しづの一声ハ蟬也
こちをここのつ　ふす。あもにうづ
むハ源氏乃我為とこての

掌ハ初のごき故之諸國守護時と
外長宮の夏と執行と故よかよい
して寺と外とも云なり
一いもうと　系図よい行ほうあてもわ
女とど男の事よりかくけた今の
解よすきのとのるると天照れ神れ
このこいつり一いぐさるりげる
人のねんとんと云
一いづ〜信よごりやと云
一いむ　辰さ〜ふ夏
一うでぐさびいまけよりう　京嬰のまけ
まうべ〜
一いらのゆげも　伊勢物語
五面白書るより
一いとのくけまるさるの
一いむこのまう〜　受戒まうる也

一いさいぶとんをさるあり
一いさう月やとふり十六夜せん
さうひとそも夕のこの渡よやもひ
てもうあくびへげとやもとふく
一いあ〜へもいまうへよもあるもごさ
とれ歳まく　一いめうものいな
めうの月るくいれ
一いきふれりれ
一いへくく　鴿　本草云頭短徊色
一いうう　心いくさ
一いめさ　大久昔ハ女子とあてぐさ
ぐさ　まうぐさるいつり
一いめう十日　去弘十日
一いくけるさ　〜づの一声ハ蟬
しるをさこのうす　あまにうづ
むハ源氏乃我為とさて乃

まつのり・源・えるのあいあう
ぬるうて
ゆるり幸
そふゆく

一いのちすぐけきい　老子曰寿者多辱
一いさとし聰　わるきぬ心也
一いまるしいろのえゆるひまり　芸　今
家・今やうさい紅梅のこさ
きあとへでこさいめもあるひ
紅梅ものもいろめくたのうて
けいにまくいうろうるまび今梅色
やいいつ・ち略ゆるーうとーさ
ごえゆるひまるーうい紅のこさう
にうりうれで・禁うよ似ちりう
よりてうう
や・せるーしあうう伊幷諾伊幷冊

繁・兄才初て文婦ゆく成治し
よりて・文婦をいりとしいうう
一いへのよ　良家のよく種性たうく
成べし・指家ふ下・上髻のよく
一いうく　有職　又右族く
一一流　寛平法皇よりうどうふべ
一冊いうくあよ　世よりの後そうり命
婦ゆかへしも同
一いうくうき道うりとも　後の世の道
乃変をいうり　一冊のえ　一いづきそと　小
ぬうくあよ風とうそのうこ宮の
やどりとうとあうしうへづさいく
きうり
きづくゆく
一いつれ　いつさか
西へ行く　一条あほう一条と
霊うり又うづ　一いきすくま　生

一いとはやき　早速
一ゆんつるぶ　掩韻　古詩の字とて
ぶてゝ下句乃末字の様　何ノ文字
や推して時　勝負
一院のいろおぐと　何処ともあてず
栄花物語よ　岩陰〳〵云ふよれ廟の
変りり　松濤　のなく様　天暦陵を
とひとして書るり
一ゆのしり又　玄のゝやこは東方めよ
一いろくのゝそ
青幣　白幣　日本記　又五色幣有
一家とるれ　雖家三四月落涙夏
一いつのしぐり五
行　一石山　聖武天
濁ル
皇ゆゝ金鶏鳥仙人建立云
一いろくのめとのつくくさめし

物ゝ　神輿　めひ物をも
くり深とも
一いまゝ　うくゝかぐるぐ
一いくくり　張騫　漢武帝使して
楫よ　天漢の源と究して
孟律よりて　午女よ　帰
とひとして
一いくくゝ　ぶ井　暴記
ゝ尼君をとして
一世の源氏
乃源氏　源氏と初て　一世
郎位例　光仁天皇　元方納云
外多異
一いまひくりの絵　花つぶ
乃変　一説秋好
一いくくり　いくくは海

臭とうと変じ我為つくさくさ
ひさくうやすまるり物解のごりとの
まのいとりげるよぬぐうるり
一いひさ　鼾睡
一家よりあるよりとめる備寝
一冊いすへを　礼楽とくうさも
くるる・南北代狩のり
一いうに　一向
一いくぐさ我ちるれる日出光照
高心
一いけ仏のれ　極浄土を云
一いつも云乃光とこめ結　衆人懲
如登春臺　註懲和
いものさたるすそこの木丁　来
澄ゐは、れ木丁めりるびり上い白く
まて、と紙或い絆よ深るる

一いさづに心心、元　古今序に絵よ
ひう女乃変　一いつりれる
人や　まるみを絵るるを云狩
一ひもてゆをいひとむ〇に般
若波羅乃心狩阿含して碎空
碎破の空理よ方等
して有空借乱を今畢竟
皆空や統て没おの模をゆり
そうへて有空一念のはうを
ふへのふ是をいひてゆけいひを
けむ云へ多う又般若のうざ
らび万法一如の心狩と云
一いふ　一乱のいとあるとて
尚侍よへ家るるくて文づへの変
我心よいれ義へとい・なより定ら
ろうう

一いそがしく　いそがしくの心
一冊　いりもの　繻子袴　奥別之文をか
よくゆどふ　詞のうらん
一冊　槙柱　いくるのうん　三位より然の文を用
あるよかゝの文をとゝあう
一いやしく　敬心
一冊　左のくだ　いくさめ　うれかさげふゝ
人うるゝ　心
一冊　家づくのそ　女この家司を
ちをとり　帝王　女選簾人夏
一いさまん　ぞ　紀巻　息巻　巻
ぐいう　息
一いすゝのう　渋城　天皇世
治さうよ　忠仕　をうして
はるとあつけ　治りとうそれ
よ女ふ文と　推ずう義

一冊　いのちうそ　いのちうも　世のき
乃巻りうねぐ　巻りうも　巻りとく
一冊　いうるれが　蔦　源氏よ　猫
を女ふよ　蔦　蔦いるよれあ
の　一冊　いづこのう人
猫うそ女ふとふ　ひ　猫
さうそう
一いうふ　色うくゆ
一冊　栢木　いものはそ　ふひいをうう
のうんうり　一冊　多ぎり　いつまうう　ぎう
うう内ぐ内り　うう家のう成
一　治ねうのいづまも不義のと
やうり
一冊　いつやうう　女この小ぎうて今ハ
うくあうのうさ義の世をあ
ふひうのひあり　あうぐうの治ひ

しとこしへて、夕雲れてくるまのつ
明めぬれの音とこゝの世のゆゝるゝ
一いそのうゝ　たゝさゝ彩ひくいゝゆく
一池の道　時移変去・樂尽悲
来毎至春日冬ノ夜ニ池道夜開
宮槻秋落長恨哥傳
一いつくのうのゝ　女人身形有五
障一一者不得作梵天王二者帝釈
三者魔王四者轉輪聖王五者佛
一いとゆゝいゝ
一いゝまゝうふゝ
一いゝ月をうゝと
身
所謂
ますゝく
還城楽陵王をあやゝんとし月の
美彩よ撥して月を午よかさゝ
つゝとゝり史記曰曽陽以戈廻
落日
一いらゝさ　金鈴

ゝ島ゝぐゝゝ心　一いゝゝゝ浅茅
ゝゝゝのゝゝゝ服装の紬を
ゝゝ服装
ゝゝよ裏ゝぐゝ　一ゝゝゝ　大義の
一いゝゝゝ　まの
裏ゝゝ乳服装の家とゝゝ
一いゝゝのゝゝ　ゝゝいゝのゝ
一いゝゝゝも　ゝゝゝゝゝゝゝ
清ゝゝよゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ
一いゝゝゝの
ゝゝ島ゝゝゝ　人ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ薫の中ゝゝよ一ゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝ　一いゝゝゝ
ゝ　鏘目不忘碁
一ゝゝゝゝよ昔もゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

一いげをげつの木漢川いどこいた

[illegible] 崇神天皇桃戦の処

一いつちの行ん 絁八りのところ田

[illegible]

[illegible]

一いげ[illegible] 伊勢万葉 中媒

一いさ舟 夜ぶと[illegible]

一舟 いげくいり 白雲の[illegible]

[illegible]

一家もえいず 鰈織[illegible]

一いさもあれ行[illegible] 真実の織よ

[illegible]

一いさちま いう[illegible] 世信よ

[illegible]

一いつの扇 [illegible]

[illegible]

一いちの[illegible] 拾政図白処

ろ

一ろくの物 禄物

一ろくの[illegible] 禄幸櫃

一六条ひつ 禄 息処乃[illegible]

とりた 兼好の小[illegible] 秋ぬの中文の

は毎 一 六十巻[illegible]

玄義十巻 釋義 戴十巻 文句十巻

蹈記十巻 摩訶止観十巻 弘決十巻

一古信の中よも 美人へ

人へ麹塵の袍を 着ると青系

いつ今も極臘乃 美人へ着ると

一古信すくを 古信冠者[illegible]

[illegible]

一六条院つくりそめ　河原院と模す　一ろんなし　無論

一六条院より　嵯峨島委しく　詳云別業也

陽成院もつくりおかれ　海辺もうつす

法院と号し　陽成院の内裏　多

内門　[illegible]　朱雀院内門

も物[illegible]　変あり　[illegible]

大臣雅信　[illegible]　長法

内堂　関白　顕得　結変あり　[illegible]

[illegible]　六条院　[illegible]

一六条院　白あい　内裏も　曹司

二条院も　[illegible]　又六条院の内

曹司あり　[illegible]

一六十法の[illegible]　大般若　転読の為

七法も六十法の中よりあるべし

一ろうどうろう　[illegible]　唱唄　[illegible]

[illegible]

一は

は　無常　あけく

[illegible]

一[illegible]　聲華　一　法　[illegible]

職員令　御門　[illegible]

[illegible]　一　[illegible]

[illegible]　鬼

日本記

三歳　[illegible]　一　[illegible]

四年七月廿三日　[illegible]　時　世外例多

女人の[illegible]　一　[illegible]

無墓　[illegible]

一[illegible]　心　[illegible]

[illegible]　寒　肌　[illegible]

[illegible]　[illegible]

一[illegible]門と更衣らの妻成
いつり[illegible]むい養育の巻
一○[illegible]校[illegible]天
願作比翼鳥在地願作連理枝
長恨哥

一[illegible]陪膳

四位殿上人のする役[illegible]
一[illegible]
一毋[illegible]
[illegible]
[illegible]
一[illegible]博士
[illegible]親王以下元服の
[illegible]東の[illegible]
一[illegible]詳あり
草[illegible]の妻[illegible]

一[illegible]不者
一[illegible]
一[illegible]
一[illegible]勵
一[illegible]

念[illegible]
盤渉調ハ冬の[illegible]
[illegible]
一[illegible]傍側わ[illegible]
飽足[illegible]依[illegible]拾
一[illegible]
一[illegible]脇[illegible]
一[illegible]常の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

かりかくると、寓薪やたんかうし
一 えらかり 兄弟く。同腹
一 母をそゆへありてハされ松風の巻く。
大井の本にて兼明親王とと記れハ
皮れ女よ准じて心よへし
一 ふるつ黒のもと黒 初よ涅をとる字
とりめぐ。又うくりわう。心ハ肝よあり
一 きらちぐさ 放書 文字のひとつぐ
きらちぐさ、りまずとよくうきはりげ
めをといふあり 一 もつしてん
ありもつしうねをあり。ゐそうとあはず
との心く 一 まつびくぐろめも 黒鳥
山海経云 東海ニ有黒歯國其俗婦
人歯染黒漆 今案ニ日本ハ東海ノ
中の國なり。皮俗よあるろふめや。首ハ
いとさかなき女ハ、ただすくうねと

かされバ古代のおぼえのならひ
まで。貴の姫君も。十歳よはあるよ
で歯黒めもあるべし
一 そうがく 仁和芹河の行幸の
次幸ニ八条院ニ為ニ作ト寄御輿之使初
造階隠云ニ見吏ア王記ニ天慶六
年也。今案ニ南階のあるよ。柱を二本
て。上をふきたるをそうがくし
や云鳳輦をひんじ。むかしハくるまよ
つくだのりきより乗れ下りれば
らんとあるり 一 蓮のうてなのまと
ぎ 蓮露 うつハの其九云蓮かかり
のさうぞくのやうにらし浪と行の
ひきうれなくだめするべし
一 蓮のいんとふとし 花宴の詩よ基と
いふ詩の字ハ。ありよりひとつ書也。

源氏の常花の事をとひしるべく
ていへるなり　一人の志ろう
おくしもるべし　しるべく用うべきれば
必ずなれ上いまろびしこゝろ
一玄の篤さ之源　春嶌嘯　弄宝
一名天長　宝考ふし云
一所あるべきなり　髪そぎの調度の中
よ。海松と一あさくらの事あり。
碁盤。山菅。山橋。海松。青月の
二。墨ぬる是等をは髪よりさき
そぎ也　一冊　そぎ　菱い
きとゝ　ふよりとり人よいあつを
もり。弗の志ろ　といろのまろ
のあり　ぬ行ぬ　ぬ
されどうひあ　なると
一まやきめる　先ゆらんとれど

うんは河よ川　帝あるべ不汗流
の心をの居く呂　呂のそ　めにてま
ゝ　ゝんの心ろ　ふろ
一八首よたてけ　考徳天皇
大化四年二月始　大極殿と
八首とふ　八首ゝとり八首
の本院なり　朱雀門の内一町
よあり南限冷泉院北限中御門
東東の方城西の坊城を限る　車
八八首の東路よ立　路
いゞ車ゝ人　絵の変
一白虹日とゝ　れゝ　とゝ
前漢書曰昔荊軻　墓燕丹儀白虹
貫日太子畏之　燕乃太子丹始
皇とゝ　とゝ　に今源氏
とゝ　ゝり　證木よ月

めいろを以用ゆる目につけて奇異
く白眼月をつけめいげども。これめきと
をうしろべしいげぐるさき事也。
荊軻をそれるるく。今源氏を荊
軻になぞらへたり。冷泉院を太子丹
になぞらへいふ詞也

一 其秋のはじめつかた　其秋御読経
同じ。源氏のおもひ給ひし宮づか
はずまひや是も源氏のおもひる
給我一向禁中なれども宮也

一 ちしのりさらじ　甕頭竹葉経
春ヲ醸シ階ノ底ノ薔薇ハ入ル夏ニ開ク

一 舟済て　ちつうりは唐のうたのすきへ是も
わうあいとくとへのうくびありと云

一 恩給　それぞものうる紙　銅をはむし　縹
唐紙

一 そうし給ふ

物ゐを見なり　ひさしからむは
もあり

一 ちらちらさ　撥眼
をうしろ髪ぬよ蜂吹柳也。且之は
ゆすでこそ読

一 母にてもうしろそ
朱雀院は延喜第十一　村上天皇は第
十四の皇子なりて。母后皇后中宮温
子の腹宣公の女也。兼明第一親王なれ
ども更衣腹故人は院之此例歟

一 そとおりさる方に　愚親に賢子あり
まさしめまし況愚子乎

一 それまじろき　梟の動かやめく
也目の動をとめずしろきさむあげとし

一 それぞさめ　歯固元三の目の食也。歯は
よわひ也則よはひをもよめり。蓬
固はよはひをいはふこゝろなり。
本より歯ををりなる一の膳に。餅大根橘

とりくるり。はし餅八迦葉のかたち
のやうの餅を用ゐ則ち國の俗
者等を添ゑ一くるりなり法ぎさ
ゆゑこのさんのゆて文をうさ言うと
ゆゑとうり　一それよりなれて
佐よかれかしと云心
一方等經の中より方等經の中より數
とるべて色〻に況のつり是い涌
經あくば眼前のさとりよつべ今の
さとりをもえべ化の衆生〻
七種のさとり一會の衆生有空
惣礼〻加無法〻三のよろこ
三〻の男へ法華威光とふふこと
心秘　一とるべ四
皓朝お仕の言羽翼已成ふつり
一わくるのちいで放智〻ふり
義

処位寝房こそ母屋の内とま
分ちつけく中と隔あ所なの
ちくとしいも〻あを立ば帳障
あ方をくさくをを中のとを
一八条式アレのは方　仁明天皇ぬ
本康親王と紫の上の文をよして
ちく宗鳥委　一栄のはちりに
し松とい早下のゆくうつん神い
姫君のくめの燒物るれば神よい
ゆくいあくど
一基のめひけのめさ袋　すさくの乳
紙ふり三月の末なゆび墨若者
引多四とくめさい結めの人よ紙
へて美物　一冊ふりるが結の
ゆゆよすひくる霜い祇の幼受の
いちちくさと古心く

一去秋の行幸　物覩行幸と云
一去のこのねい　去の間の大変ある
いかなるべきの引つくしたるぶもんと
源氏乃ことあるべくぞ
一ちくさきれ　飯黒心
一巻のうをとくこの　来世いおるべ　蓮
一冊ちすの葉　来世　蓮
臺と成る事ども　あぐと月の別りかる
しきとく　女三の　はすの身とこの
くて法事とゝ　五倉撰心　弄芝委
一冊羽衣の　羽衣いと　縁よいつり早
竟皆空と後の
一冊巻の巻よ　巻のうにさそうく多て
りるさく　早下の　ゆのあるり
すくるべまゝ　ゆのあるべ
つゝ　一竹川　一生法

那家紀　安らへも　上の恋心
ざ　巻第紀　宮
一指南　指下の　姫大弱　指
一巻うり　猫　猫
一くゝ也　大力　守乃為　一説みそ
この車　れば　法の轉
一冊くゝなり　中　巻の除服と讀法
一巻ちゝ　ひゝ
一巻のゝ　又是　花中　偏愛
花開後更無巻　元性
一車やまの　大
とゝし紙へ
一冊ゝ　海　冊の毎　早下
ゝ　薮州の　早下　毎
文とゝ

一[illegible]　[illegible]
[illegible]欲班屋[illegible]四位の位の人[illegible]
用[illegible]・[illegible]者爲屋[illegible]諒闇よ
い班屋とは[illegible]
一[illegible]　[illegible]
[illegible]
[illegible]実よ[illegible]
一[illegible]すの[illegible]　蓮子数盃と詩よ[illegible]
[illegible]の[illegible]青磁の
[illegible]
陵園妾云・[illegible]　一葉の[illegible]薄
白氏文集[illegible]寺い[illegible]恩の[illegible]
云・今物語の[illegible]命[illegible]の[illegible]

に

一[illegible]　無[illegible]
[illegible]

一[illegible]
一三のまち・[illegible]町と[illegible]
一[illegible]　富貴[illegible]と[illegible]饒舌
一[illegible]　[illegible]
一[illegible]
一[illegible]
一[illegible]　西[illegible]
一[illegible]　[illegible]三ヶ月の[illegible]
一[illegible]　祖母の服[illegible]三ヶ月の[illegible]
[illegible]

[illegible]の黒[illegible]
一仁王會　七[illegible]昆[illegible]の文[illegible]
[illegible]
一[illegible]の[illegible]

一にびきの寺　眼老の下に菩薩のつら
わらしまびきの布を用。黒几帳也
八本丁乃まを見めりめてまちまゐ
らてん之帷ハ是もまびいろなり
一にほうく　へ宮之　一にわ島よ　嶋島ハ
松浦とりげとあらり島之。若ごりしけ
やめとらけをあつらふ之衆数と。源氏と
引別ら御ことまいられ之。わくまあいゐ
こも之。御とてとと五常每ごとうく
日本記　廿巻　始ニ神代ニ至ニ持統天皇御
宇ニ　一西山うり御むろ　仁
和寺とまた光孝天皇の御影なとして。
仁和年中よはしまれ給ふより仁和
寺と号をう。文義平御門ハ天暦六年
三月御出家ありて。四月よ仁和寺よ
遷られありし。物御乃朱雀院い兼

一卒れ門准してかれ是とき合書見之
にしのさく十方　従是西方過十万
億佛土有世界名為極楽阿弥陀経
一われ下にわひもあくろきうへのさぬ思さ
あまらひあしそ立之。もらりきねと
ハ。らんの下襲乃いろくえびはの袖
も。最上人の下襲のそそぐ之
一よこそにいりうしぬ御有よこそ　はささ
乃声とれ息処の給よつきてよお
いぬ御方之。弟をさしてのあらせ
一にあさ　純とうりありせ
一にくさこれうしや、ゆるへさ推仙窟
容顔似舅潘安仁之外甥気調如
兄崔季珪之小妹気調のいさざし
ハ兄のじとしと云詞よていうへとうり。思文
の爰をさる。女一つ家よ似のつる文

の光をてらせば、とうの人、とうの
再一弟子、おい女二の子のほこれうこうの
うちとものひとくさせたりてこれ
しるべいかるに似あるべし心なり

ほ

一ほい　本ちと

一ほく　ものを　お姿て

一ほう　一ほうらの山是

一ほうげ　史彩

うちうち和らもうさ如よあとへて言

一ほうけづさ　仏法めさ

一ほくゆめく　とくまもうちあう

方曲

一ほうう心ある

一ほの　ほのうも　ほのうに　葬りしと言

彩塔よりとり、今が將ぐ妻なれて、

それとうこの心ある

一ほのめる　ほいち　教よとは、我心ぐま

ほへとひうぶうう

一仏のれちうべいくうさあるも　從

冥入於冥永不聞佛名　法花經

一仏いとのうとうて　上の何よほうの

れちうへうま、ちいつふけいほみ

のちう信りんちの

一は菩三味とこのようのとんほうの

しるこ山おろうに　止観よりの

三味あり、いくゆう常行常座半行

半座、非行非座、四種、は光明懺法く、

半行半座の三味懺法く、天台師式

沈存式つうのして　六時よ六根の

罪と懺悔すく　六塵有房に

云懺法の基よ風のあうしぶ

影のうとひ　口伝の方と

とひうとうく　昔いうく安

[illegible]

一ほうんの本ものの名

一ほそろくより保曽呂倶世利禾

一ほそろく　一ほそろく　弥と云

一ほそろく廃　廊と　一法界三昧普賢

大士　南無法界三昧普賢全相云

大士と同意と法界衆生普賢と同た

いと云義と　一ほうと　一ほうと

ほうとうの心　一ほいとゆそか

れうの心　一ほうとう　仁徳天

皇のれ時始てうれしの河と

一ほんさんのうと　弄　世と改は意

と紙と　一ほうと　寛等供奉の

一はしはひまうと　歌又行意ものも

歌又行意ものも

一ほうの如あるのひうと

一ほうの星のまいまと　花けはの

毎ひうく面白く　新のろうと心と

一ほうとうとうひうと　花うつかの

ぐうのも号とつ　ひ意あり　ほの方

よいうとさ肩ぐと　ひぐる

よのるのひうと　ほうのうと

一郭名のと　月安西外語二十二下

東の後面中に壱一　仏のうとさ心

まて九如来世の中とい凡聖一如

若亦不二の理を法く衆生のと

ひと遠と　[illegible]

悪心うとさ心と　[illegible]

嶽王て嶽厳経説信取いうも

孤猿うとうきやうらくみどう

さうく前生よとのつり仏と

報身のもぐさ　幻の報ぐさ　是
又　三界唯
一心のほのれば　仏のほとけ
一ぼぐさ　仏の内海あそび
くされば則菩提則煩悩　純一妻
相　又より別のほのし
一ほそびつめ　絹帷
一ほどく　驚く
一ぼんよすぐさ　玉と女の本
一ほひすり　朝めさまし
一ほうに　東西女のさろかりざめ
一ほそなぐ　若后女
ここそのぬ
なしも　用組
一仏のこと　仏の眼より滅
つも　常住不滅　滅

きつのぐ　弟子の連歌　尼
のぶとき
一ぼんしつふ　梵字
一仏のおぐちなめい　花は帳臺
うへよ　仏こおろ　絵の机
ぬべ　一仏のおつすなる処
観経云　阿弥陀仏去世不遠　極楽荘
厳おりしゆく
一仏のもとりのへ　然の我
ふなり
のりよ　一ほよふぐめ　中君
きくの　下よ
出め　ぬのもと
一ほうりぐこ　その色
一ほうけい　經日　實語者不詐語者云
く　一法華

貞信公建立しめ給
一仏のたまふ　仏乃つまゝ　ゆんこゝろ
一ほうけ　ほうめさしうゝ心名者の善
をすくるくゝ　くゝつさうゝ
一ほつえ　本末
一ほく　反言　うんくとゝ　すべ
へ
一へうる　別紙　前よりうる　曇
司人の任
一へんぐえ　変化
一へんゝ　光　平定文が　ゆぎうゝ　言　平
伊　宇治方物を物語　玄　平仲が女のと
くゝゆきん　おくまわとして　双の奴
とゝうゝ　ゝうより　ちく　月とめしけ
と　ぬ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ちゝて　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
とゝ　ゝ

紙　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
すゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
人　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ん　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
一　ん　つ　ゝ　文　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　紙　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　河海　ゝ
一　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
生　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ど　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
形　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
変化　ゝ　山　拾遺　ゝ　文珠　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

去ゝごとく　宗鳥上下異之

一へいさつ　変義八幡社家の神子信
ゆく人立後ゆく人　つと十二人をり毎日是
しゝ旅神祇東海道をたゝせゝる
それと陶淵の立寄此処の陶淵い
迎来つゝ　のくゝり
一つゝくゝ　如この銀いつゝくゝ
ちゝりても　源氏の心
じきしの心し　一つゝてゝ　心
ゝりい　苦悩　ゝれとい　なり

一ゝゝ　と
一ゝゝ　聚　ゝくいゝみつゝゝ
てよく成べし　生人ゝくゝ　心
同一　一このね　常恵
一ゝゝにゝゝのものゝ　ものゝ
一ゝくゝ　ゝゝくゝの心

一ゝげさせ　ゝゝゝもゝゝゝ心
一ゝもゝゝゝゝゝゝゝ　長恨冊　孤燈　地盡
未熟眠　一ゝゝ　心食
つゝゝゝゝゝ　ゝゝ島のゝゝゝ
一ゝゝゝゝゝ　邪をゝゝゝ
一ゝゝゝゝゝ　本妻ゝゝゝ
一ゝゝゝゝゝ　ゝの心
一ゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝの心
一ゝゝゝ　ゝゝ友ゝゝ　ゝゝの
変ゝ方　芸ゝゝ
一ゝゝゝゝ　ゝ馬京弁　ゝゝ
ゝ幌ゝゝゝ　ゝゝの
一ゝゝゝゝゝ　ゝ
一ゝゝゝ
一ゝゝゝゝゝ　ゝゝ書戸のゝ
ゝり　一ゝゝゝゝゝ

まへ事ゐ四ごごぢぐろうべー
一ちげごうー　れ也西の始いつまの
うー　をさ海くいひるひー後
又ひさうへー　ととづゆざーんいいて
なーさとるり　一ひりんん
ちりて　ちうー　まのさーいさ
よとひいねど海ゆさーいすく抽く
一ちちちのーえ　讀緩聲　信都ろて
引声のあちと經歌
一ちに　ぬく　一　うれけりてひ
ゐーるい　優曇花の言くへ者八
万歳の取節　金輪王　遠四加其時
海水半減すよりくい岳出歌
ひりと　一ちこうてまつ
猫鉢　一ちあーいふけ
史婦の中ないつづきるもあーびを

ありめけるどのいふとばうの心ゐ
一あちこ海ゐる多も　こうまる多い源清い美く
心とうとくこいは見びのもけよる
ゐ長ひ出を海のうーゆふりり
一ちちのんの方流　西洞院とも東洞
院ちもいふべー一ちーくの扇花盞
宮殿ハ弱微殿のわよあり楊柳い
又盞花殿のーにいる。いつもも
ゐれちちさ殿のうんむれうりとん
洲ちーはんもちあび摩よむれ
ゐちりー　一とのゆーさふーを
こハづくりり花鳥和歌する四海
よ人のちーつくあの流られの巻よ
くこんぼくれといるぬへーとと
一ちーひとつこ戸巻る山羽様打云
宮ト年ちちの時い左陣毎訓演紙

丑寅刻ハ右陣勤之。丑刻物節
入卯當卯候由ニ云ミ畧之
一こゝろあはせこゝろよ 虎猴
一友ちどり 我身よりともへいの鳥ハ
ともとつまごひの心也。毎の事とい。
ほかも又数の人よこともあやうきなり
んとさ 一 ことひ 糸人也
一ことふやうに 船路まさ。たゝきさ
一 ことのはゝけしさ 波風に 弄 十二
三歳の時。遣唐使として。波斯國
に到る。字琴声孝行のさた。阿
修羅琴を造りておもしろき。
其ことのはの物語ことのげ。がくことも
のまへ。かたちへいかさるに。あく
風にあひて。波斯國に行。又栴
檀にまうでに。琴をひきて。あそぶ気

まかりて。琴をかなひ終てかり。霊を
みせ。天地をうごかし。日本にかへりて
名をあげたる也
一寄 ことのつきの節会 年中の節会也
一毋 ことしよりまで この節ハみなよそへて親
ご讀みて 一 ことしかりて家
れそ 蔣雲深閣の宴三月すゑ
一 兩この大臣 太政大臣内大臣前相
饗食の宴歟 一 ことりゆの手法さ
筆取由之。ゆのあと。左の手まで琴を
なれ事なるべし
一 ことし 年臨。一説ことしとは十よ
ころを云之。年満ミ
一 年月をこりめまで。あさくらし
夕かの此詞東橘寒より同。むかしより
とかくん為に。もたらの宴とかり

一舟にてとをく舟の心面白きうつのす
と若くぐさゆさいとなきわんど
つるよ。後鑑よりこれるべ沖のつし
ところんさこ鑑うろうん面とも高くあ
出ばゆ。ゆ。ひけるゆくよ。詞ともし
けり弄こうをとくの言を。づ面白
ようやく鑑いるるり。ひとめども。
なをとあるやうにゆひきうするく
一舟にて身を　後遺集より出の類あり。
引舟松よ　一　多のぐく茶にに
島い一越河ふこ。島のふよ感して。茶
う鳴鶯。こ池の出るも鳴ること
一こわりごとくこ茶こわりの迫屋をこ
一こうしてこうして　あるりてこの奥こ首よ
もりうる面こ。こりい外こ。と面よな
つくこ

一茶文の宣旨なる門侍のもげ。女の居
こ宣旨こ門侍こ茶居こうるり。
出湯よまつるこうるべ
一年こ茶秋の沖茶よ　ぬこ道
の秋よ。毎こ。こ沖茶面茶。こ
よ彩をくこへゆうこ
一こうすること　整たいこと
の夏こ
ふこ河海　一時ぬ当霜を
出こ面つよ。ゆくぐのこへのこ
とて。茶のぐくよこ。今一つまつる
六月中十日のほとに雪ふとの
ぐくこうくふ門ねさしねど
ふこての作。けるこの手べ。ゆこ
しこてすりこり。見いこくと云

[illegible]

一こうしのこと　白氏文集の四十五

一長恨哥の[illegible]　白氏文集の四十五

玄宗の楊貴妃をとられのひとを

と相愛の[illegible]門の文衣をとられ給

ひしよ　同じ　一長生殿　玄宗

の[illegible]　相愛の者をよ[illegible]

とうとうやはりとられ給ふ

一ちりぐり　[illegible]ほりかどいふ

一こうしのこと　常盤ゆかりのこと

一ちうしあい　物語　一こうはこ十ぜん　又

[illegible]　行っても見ゆ　ゆかりの女の

[illegible]　[illegible]

一さのりりのこと　[illegible]

[illegible]書　女とじ　又女どもの宴を呼ぶ

常のこと

源氏目録巻第二

ち

一長恨哥の[illegible]　白氏文集の四十五

玄宗の楊貴妃をとられのひとを

と相愛の[illegible]門の文衣をとられ給

ひしよ　同じ　一長生殿　玄宗

の[illegible]　相愛の者をよ[illegible]

とうとうやはりとられ給ふ

一ちりぐり　[illegible]ほりかどいふ

[illegible]

一こうしのこと　常盤ゆかりのこと

一ちうしあい　物語　一こうはこ十ぜん　又

[illegible]　行っても見ゆ　ゆかりの女の

[illegible]　[illegible]

一さのりりのこと　[illegible]

[illegible]書　女とじ　又女どもの宴を呼ぶ

常のこと

源氏目録巻第二

ち

一長恨哥の[illegible]　白氏文集の四十五

玄宗の楊貴妃をとられのひとを

と相愛の[illegible]門の文衣をとられ給

ひしよ　同じ　一長生殿　玄宗

の[illegible]　相愛の者をよ[illegible]

とうとうやはりとられ給ふ

一ちりぐり　[illegible]ほりかどいふ

[illegible]

一こうしのこと　常盤ゆかりのこと

一ちうしあい　物語　一こうはこ十ぜん　又

[illegible]　行っても見ゆ　ゆかりの女の

[illegible]　[illegible]

一さのりりのこと　[illegible]

[illegible]書　女とじ　又女どもの宴を呼ぶ

常のこと

源氏目録巻第二

ち

一長恨哥の[illegible]　白氏文集の四十五

玄宗の楊貴妃をとられのひとを

と相愛の[illegible]門の文衣をとられ給

ひしよ　同じ　一長生殿　玄宗

の[illegible]　相愛の者をよ[illegible]

とうとうやはりとられ給ふ

一ちりぐり　[illegible]ほりかどいふ

[illegible]

一こうしのこと　常盤ゆかりのこと

一ちうしあい　物語　一こうはこ十ぜん　又

[illegible]　行っても見ゆ　ゆかりの女の

[illegible]　[illegible]

一さのりりのこと　[illegible]

[illegible]書　女とじ　又女どもの宴を呼ぶ

常のこと

源氏目録巻第二

ち

一長恨哥の[illegible]　白氏文集の四十五

玄宗の楊貴妃をとられのひとを

と相愛の[illegible]門の文衣をとられ給

ひしよ　同じ　一長生殿　玄宗

の[illegible]　相愛の者をよ[illegible]

とうとうやはりとられ給ふ

一ちりぐり　[illegible]ほりかどいふ

[illegible]

[illegible]

一所ちいろとも　ムちしる塩のこい塩の心
ちいろとめるれとまり・然上やうく
おくるひの四
一ちくしふしもしおど　延喜式云凡宴内
親王除行・豫定監送使参議一人
或中納言　弁一人・史一人・六位以下官人
一人・西宮大臣着陣宣旨前大中納言
各一人・参議二人・四位四人・已上・勅使
中納言参議各一人・四位六人・長奉
送使中納言・若参議・弁・史・中務丞
各一人・已上・養・同下・外記云々作式
[illegible]・群行の日・以前七
勅使云・河原まて・供奉して・常
参す・長奉送使・仲勢まて・さる
ひとり・上海の河・号・場殿よすして

こゆくの下着の由と養門もて
はべ・[illegible]れあるし・職・変して
作[illegible]事・河・拾遺集の哥の何
[illegible]

一ちしのへくもり
のふ七十老・上云七十以上・仕懸其処・仕ふ車
孝經注・執政臣致仕例・暑之・[illegible]
[illegible]七十よりありく出はすまして
[illegible]
祖の廟よりうるる車をも先
懸車の齡・[illegible]
[illegible]
海よりうるれとうるる変あり設
[illegible]
一千枝つはのり　千枝常則立高名録共
一長恨哥　王昭云　初名紀八馬嵬
[illegible]
仍[illegible]

ちゝさすこと弄たのしみそしとは変
ずり。琵琶ことさらハちゝ琵琶ことハ
むしとも　一 中ねのこふの清う
さのまつび。五月五日を荒手番也
日とまへ書之く　兎・弁清へ左近の
真手番とめ月五日にあるまて夕
射。中将左近うる殺よ。とのことも行
清わくまろん以う曲尺清く弄弁う
かひハ馬ゆるの時。二人清らけて射
る事移　一 ちゝけんまあり
めべきいつるおもつみ也之二仏の申
あく　一 ちりすさあう
遊糸あるく　一 ちしき地鋪ハ
一 唐遊よ吉夜ゝ槃べりつけさるゆき
一 ちす帙箕 書抱の帳く
一 ちやのめしつきに庭の。ちさぐ

者ことはしひつてらくあるべし
一 ちゝいとゐふるを 銃あるぬ
ふなちざうつまいあるなく
一 持仏　持仏堂ハいまくあるら
しざまでも。先仏供養の用ゆく
一 ちんのにゝい　捌ちんハ燃く
一 ちやしぞめ　丁子染香の異名
一 ちうきまあり　逆修大将
一 ちりゆしき清丁　ちりの清わりある
かきゝ心く　一 ちり傾い　玉く
よ。宗もちりはへきまる。ちりはば
りう山

り

一 りむじれそあるしい　何をても。仏
あまりさるふの事をいうと際ゝ時
せいふく　一 りむしの祭きん

御系　変乃陰時の条十一月より
うるく、帝日の中の間、そをゆ条や
を御系の年日、門裏ゝてゝ
一りちのをゝへい律は秋とけゝをる。
ぬとゆゝをけっけどゝくしゝ千
月なしゝ冬に秋より属す
一柳宗苑　上手ハあり葉あり今い
ゝりん
ゝり
客とゝゝやゝゝ一りんゝゝゝく
りゝゝ。摂政の職とゝゝゝ但なれ
べ。なしゝゝくゝゝゝゝゝ。四月二三
月乃ち言人の言葉ゝゝとゝ。
わ葉ゝゝゝ
一龍頭鷁首　竜の水と心ゝ鷁
い風と心ゝ鷁ゝゝ。故に形ゝ
一りちをゝつぎの拍子ゝゝゝを

次呂ハ共律ハ秋ゝ日本ハ呂律、唐
律呂本ハ律呂ゝ云律ハ陽正呂
陰助。御ゝ呂ゝゝ呂律とい
く律とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ。源氏ゝゝゝ調曲をゝゝ
りゝゝのゝゝく。呂律ゝ律ゝ
りゝゝゝゝゝゝゝゝ。
本朝伶倫のゝゝゝ呂律ゝゝ
ゝ用ゝゝゝ一りんの手　系
ゝりゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ

ぬ

一ぬきゝゝゝ　ぬきすゝゝゝ
一ぬきゝゝ　誓首　額突　祈祥
一ぬきゝ　殺斎　祈りて　道祖神
ゝゝゝゝゝ　一ぬゝゝゝゝゝ

源乃つ為とつまとめはこみて
はりつさ　ゆくい行法
一めりくしあり　腐まそるどろ
ゐと言
一めとん賊・貪愛
とくかのほしつるゆつり
一めさうけする　捧物の衣うきた
乳粥
一丹めくもめへそ　玉
いあのそつあざかあるゆなれだ
めさやめめむ乃城なれいかこ
る
一うう素　むうつ乃動名
一るい　親影　一るそん　三ふちう
流轉三界中・息愛・不能斷・弃恩・
入出家

一かさうめいひとさんやすゆ

隋
一仏法のこりと
くあ　夜者專夜晝同輩長限
やぐそさみくくせい・文衣のそのま
ゆめ法　一とさそうれば
けくいある心　何控
一れはめ度　納屋　在後涼夜　法ゆよ
ゆまくるゆなさあるはく
一をよとりそおはる　助及成人
心
一なあゆまつる
一ねくぎとはる
雑
鳥遣ゆをと言　愛石
一おりくさ　面月らさ
一とくちかくさ　押立
日本記　俗よ乳はるをいはる
一おりの　はる膳とゆ　膳
一れと　祖母・ゆるはゆよぐ

あくとおほくいへり
一 おほやけ 公 一 おほしてまゐると
いふ事をおもはしめすと云こゝろお
ほしくおぼしてすこしいふ也。
とゞまりてゐるへし
一 おはしぬれば 貴乃東のかさし。清
涼殿の御座をも云也。東ノ庇縁ひさし
なるへし 一 大殿ゆかしき人
殿人のとの内の殿つとむると云二人
まふへし 一 御ぞ 云まふり
かく 元服以前は赤色の袍の腰
をめく。元服以後はあつきめしく 黄
なる袍をたまはる也。又浅黄とも
いへり 一 おほきに 御酒
一 おとゞげしきとは 大臣の源氏乃
葵の上の事をさしてのたまふにはのありし

給ふをいへり 一 おとゞまゐり給へ
き 御盃の盃酒は殿上まで引出の大臣
は又より節会にめしての盃を給ふる也
一 おとゞさ 御さいさめのうた是を大
はあり。男は束帯直衣なりにも大
褂はうちきめる也。大褂は男。小褂は女の
きる也 一 おりひつものこと
折櫃 木をまげたる器乃物のる也。
此ものは何となく用ゆる器なるべし
西宮記ニ云 木物枝物花菓子之器を
くみて器様をしきて。五菓をくて。
木ノ枝。或はおりよするなり。大臣以下は浅
より勝事を給て調をとりて元服の時
のくつはたけげめる物也と云々
一 おほいとの 大臣殿
一 おとゞわかく わんじつの也

一[illegible]さ　[illegible]

一おもく　[illegible]と忘式ハ頗又[illegible]と
忘心　元優長なる意　面目らしき
[illegible]

一たほとをぶり　油ひく

一ものゲもく河　各競　八雲おこ云[illegible]

あく　一たやぞう　大惣
大[illegible]心　[illegible]れいものも

なんにくゆ[illegible]きい女のこれいこ　[illegible]
ハ体ものこ　雅つくゆ[illegible]きいあり[illegible]

ゆ[illegible]　一ひさたこれ

京のち　歌の家よあ[illegible]と云
前　楊家有女初長成　養在深閨人
未識　長恨哥　一たはこれ　大や[illegible]

よ　乃ぞりなる[illegible]河　穏

一ゆ[illegible]　[illegible]ゆは[illegible]　面白

[illegible]ゆよ　[illegible]人家　又我女よあ
[illegible]　一　大[illegible]十の和　七八
[illegible]　一　たはこう　ゆはとき
[illegible]　一　たはやけ[illegible]ゆ

一[illegible]　人よ恨　[illegible]

一おこ[illegible]　嗚呼　[illegible]
心[illegible]　おそろしき心　驚
[illegible]　一　たい[illegible]　[illegible]

一わりてあ[illegible]　面月　[illegible]
[illegible]　[illegible]

一わそ[illegible]　形遠　文鹿　[illegible]
月[illegible]　[illegible]

一をすひり[illegible]　小杉　[illegible]
一おいいなる[illegible]
一たいはこ[illegible]　[illegible]

一をそーく　如あやかなるあ、ゆ、や　一れこめさて　鬼
るるく　のくぐく　ゆ、おりこうはつくと云
一れまー　れ　産はく
一れはうい　信よこばけるうつ
ゆ、ぐ、ぐんなくとおはうくと云
ゆり
と同ゆ、
ねをおさへ、
一をこにそ　うけけあくく
一れはちのはま　路　はま路　大海
一をのれりうり　ゆりのまひけあ、
夕鳥くいくんあくくの縁よて、名が
まひけあくいり
一をうくへ　遠近
一をこゆり　海のくけくと高ごと

あくくくはくそよはくくタの縁
結とをこあくく云
一れさひたる　舞　されと云況りを
ゆりる　色あり
一れはをよ　作ゑ　いひつけよこの心
一れはけはく　天心　我よ似合ぬるを
はけあくくくいり
一をこゆひへ　行人ゑ
一れくまりあく　はくふくさ　心ゑ　万葉
よ、おくゆへくくまりあ、又　奥　日本記
一れひあん　ワくあい　世ゑ　詩　ア
あよくへあり　さくんくくはさい
かくい　ゆくはくさのくをゆへはく
くりへくくくはくりあるゆくや
一れをー　くくゆあはくれー　結　ゆのくゆ
はくゆはあくくはくー　ゆくくくはくー

の文字の法の
一をこなしのらう　行労
一れんぐ　一れんぐともなく成わ
かぐりし　たりかの寒よりけてか
りしらくへしくあり　とまや云心れ
一れんぐふうさに別よ思ふのあるこ
けり　一大のちりさ尺八
の笛　河大筆簗詠尺八　拾仙家
一尺八寸　舌四寸八分　律書圖云大筆
簗小筆簗　又曰尺八為短笛
玄宗皇帝前身　羅漢也　好吹尺
八　彼擯出ら
一れんいしくは墓　秘色　今の紫
硯　秘色　磁器　越州ものあるま
けるを　拍　そのを翠青にしてほよ
勝しり　仍そこと秘蔵して　弱きの

不用　故に秘色ものの物
沙ようしくのつさ　今業のそくも
ま業硯の彩　一れをうぐに　せかう
せしのあるこ　一れとこぐかう　正
月十日月八日よ　京中の指ての月う
ふして拍のとを　方をとうして
方家とうぐくしいり　男踏哥と
それをまのぐり　近代いあてのし
との変よこの秋方　弟しそあり　踏哥
とやこのり　花る　初名の寒よ妻
一れひのとりを　上の羽よりくあ
らんやつぐ　るよりまのをりをし迄
一れりくよいくあると　大こに言
ここさくし云心ものり
一世ぐくくかさい三月尼云九月
辛去　毎方い三ケ月の昭せるはり

て十一月毎日よ除服之給ふ
一なほしうつくしき事　桐帝い源氏
のれるのいとうつくしう給へるより
一おほい中将のなりかけりうつくしと
しうつくしうとのうつくしう　花鳥　直衣
人びとのい直衣のくしと常に用
あるべく今の世もいと上の上常いけり
なほしのこれとうつくしうるるなり衣の直
衣い二藍或花田とまよりて着し
源氏い宰相中将に成二あるのうつくし
中将いまいまうつくしうあれど宮ひと
とりて二藍の直衣と着用
すべし宮のうつくさい富海のうつくを
うつくる宮のひとくいうつくうつくと用
うつくしく前裏葉の美しう夕方
宰相中将のなくとしのう源氏美

君の給ふて非参議の程ばかりなる
なりうつくしうけるとの
のうつくしい二位三位なるの
中ねとのふとてよ夕雲いへ雲よ星
進し給ふなれば花田のなをし
ときのうつくしき桃の美よ源
氏の芳をうつくしい二藍なるのいぞ
よ海はうれてうつくしうあり　いよ部中将い
これ二藍なれば　ワうれ直衣うつくし
うつくしうつくしう　近代直衣の前
下襲名のうつくをとりうつくし　禁多人多藤
芳　面白堂裏濃キ袴　夏二藍　穀　ものうつくし
直衣をうつくほとの人いなほしの
ものを用へうつくるを直衣うつ
人の下うつくもうつくもうつくし畳紙
うつくうつくう一なほやけうつくし

くそうしてくだけうせて、紙中の贄
首くるよう、宣下の事ども、後
と云

一をかしくさぶらん
りぬのはかちあくるくあれよとんと
一たんくつぐらに　腔病の心
一けんなど　源氏のとくとくいくんと業
就よりて、けのゆあとへくるく
一寄　大くるに　業のとがさい浦く心とをく
ハ心とくるく
一たは云ひぐさ
常の袍よ打乗と着して裾と引い
よ乃夏さ、主長よ裾とうるい志よの
なさ如さもいつべし。あぶれある
いまれあるるつも、その心あくるく
し、はまえ王のあく大人のとぶ
ぐ云心なり、又主長すぐとざる
ちはまえすぐいつ侍あり

一をとなく　源内侍を、源氏のちち
なくゆずれはぬりくぶくくるく
一たくくく　男くくくくくぶり侍れいも　光相
一たやくくくくぶり侍へ、天延三年よ女子よ
けん如、親王、親王、天延三年よ女子よ
ぶくくくくぶり侍へ、は母　徽子女王　皇朝親王女
くくくくぶり侍へり、いまのあ侍よ
白条院と、徽子女王にはなぶくく
てはられば、是くくくくよ母よあい
くくくくくくくの例なくくくくくあ
くくくくくくくべし
一寄　をとめてのり　未通女　万　サト女　某記
し女
も　儼
一たくあるに海
一たくさめくくい　八雲
おけちめいト女くくくくくくくくくく
家よ地と納るト女くくくくくくくく

生ぬの繼二幅とめしれてあの湯と
結合そ心丸とのぐーうけわぬぐ山
女しーとゆーヤ云灌く
一たゆ清ゝ厦 永王帰京の母大和路と
つて桜津よ発て雑炊ましてしめ
つくく七日よ大江の儲所よ行結十
日よ京ゝ結く 級大江厦い秋之敗
京ゝ旅籠く 畢は代一交秋之の蒸
しろりれば蒸くめゝ〻つるよや
一思賜の江衣いいまこに去年今骨
侍清涼 秋憶詩篇 独粥腸 息腸
御衣今在哉 捧將毎日拝餘香
聖廟の作

一れそれ分もる
あび 江門の源よれて結つる夏菊
りつくゝざら夏ひれと結り結し
ゝ一たゆい厦 大鑿

新花示記 巨炊屋 旧記ゝ多天炊屋三吉

一れのりづゝひのひて朱雀院の江月と
つゝひ結夏いい三条院ゝれめりづゝ
結りよゝひゝとくあつへ
一花清ぞゝの星の光と七夕祭よ洗
のゆを巻上りとゝゝて、ゆーの光と
ゝ清てゝるゝ
一をのゝゝゝつけある身こや
一花れりの をろりるりく
童子の囲碁石室山見数
不飢局味終斧柯爛尽既帰無復
晉王質石室山見一物一如事桜倉之
時人
大江御
一木ほゝあゝび
一木ひゝめし
行風の巻ゝよあゝれ松ゝゝゝ
加ゆひゝゝみのゝり

一おかつをゆくし　ゆめのごとい出まいらく響
とくやすく　一れんらくぬそして
お車えいゆ仲ゆ　後三位は信そし
てい一ふ乃度ゆ。内大臣けらく一修よ
ぬのすく後一位也聴午車之寛弘八
八月。左大臣菊原朔日条午車入待
賢門上東門ふ之
一おびたゞけなさ　とのされぬすさ
ぬひくさわをゆ　ゆるしもとつ
一をひれある　ゆるされびれるく一稼
大やゝけるゆ
一おなどけらひよとして　各留半
座条菊墓待我廟は同行人
法眼後修五會懺　一とゝいけらすほじ
ゝ弄昇進よんの遂なうさ
一おろひ　ゆどらひゆ。すさいさ

ろゆ
ど　九ゆ三月早下ろる
もゝい陛下のろ
饗けどもんゆ数のあれ交と
くさんこんあらくいり
一おゝ　右近大臣　内大臣轉右近大臣
例恵義ゆ。け外ゝ例ゆ法ゆ委
一おひすどし　ひオくのゆ。おいけど
さゆろゆ
なさ夏ゆ　一おれる　すく
病ゆ不ゆなゆ　一おくたさ　能
一れうりけゆいり行　ゆくとる
源氏の後へうけ行ふり
一おどゝあどひ　若經日滿而不盈
一れさゆびや
一おけやけどひさゆうり　左の

騎射ハうまゆみ。中サねハ不射之。古
来より流鏑馬といふも馬よのりて
的を射なり　一 たなしかさしまて
なくさめん　源の通りのうたによめる
にも内大臣のおほいまうちきみしもあく
ひかりてなくけりんめ。拜老屋之
一 たゝしこゝろありしこそ大乗 二巻 若
得為人聾喑瘖瘂謗斯経 故
獲罪如是 法花
一 おやおやのけうかう　論語曰。子游問孝
子曰。今之孝者是謂能養。至於犬
馬皆能有養。不敬何以別乎
一 をこりあひぬて　風病発之
一 大原野の行幸　延長六年十二月五
日。大原野に行幸をなしてけり
まゐる女男などの
一 たれくさま

われくさまさ。たれてまゐる同心
一 なほやけさあまてけるを　定法のま
いわまりをうらやましとてもなき意
なる内侍のかみの職くらにめしお
さるゝいかなくしまさのや。又されども人
うらにもよるゑくわくるり
一 たちばなの　落栗色之　ここにゐの
襖とうち。紅葉といふ説あり。紅葉
の袈裟よりは見とくあるく
一 かふくもいはゆるハ　三月なれば八月廿日
にうるへきぬ　花に誤れ　たおりしの
蘭ハ。蘭衣の心よらせあり。又もあそ
ちとせの縁さそ　一 女ハ三つよきたか
よ　婦人有三従之義無専用之道
故未嫁従父。既嫁従夫。死従子。故父
子ノ天也。夫ハ妻ノ天也。源の巻をなれも

又実又あるるこゝろ弄ぶく

一たゝいなどつけて　嫗　老女のるく

一冊　おりくめらてはし　寒毋の夏とく

てゝあり。つゝり門。あの門よりみる

ゝ。人の涙とくゝゝさゝ。人の書にゝん

とい母もはぶりしとのゝゝゝ

一冊　おもくびよ　中道い玉への通路く

一冊　おるでしよ　鳥い巣よ二ゝゝ

のとけり。玉を鴨　あよけゝく。仰

一　ゝゝ見よたゝ

一おびゝしゝさちゝ　思前

一おものてゝ　下巣い書の

けり。なもけくゝゝ

ど。ゝゝゝゆゝたゝ

心記

く　切灯　色ゝゝかさあり

一あのゝゝけんかゝ　ゝ　ゝ

軒遂誠よ。たゝ　時平　先ま

有知矢ゝあり　一　ゝ

門　ハたゝ　ゝ

ゝゝゝゝゝゝ

ゝみゝあり。ゝ

ゝ

一　ゝ

ゝゝ。ゝ

ゝり　一をゝ

ふゝ　河　置物　唐羅　赤濃霞

一　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ

ゝ　ゝ

委

ゝふゝゝ

男八感陰　秋思安ゝ毛詩

一ゝゝゝゝゝ　ゝゝゝ

一　女い去ゝゝ

女い感陽気ふ　春思勇

ゝ　ゝ　ゝ　

一をゝてひろさうけいはゝ人のこゝろ
つゐはよゝ〳〵くの絵
一冊 たゝてゆく京もさゝぬ花は奇
てよとくいさうる冊くいつくの文やよ
心をやりてこゝろへさゝ〳〵形そは奇の
絵るいろ 後崇光院御本如件
一女のあいこれおのゝ〳〵つくき 親も
人をあのゝ〳〵つくゝ〳〵ゝ〳〵れもよい女そこく
女人為業障 温盤盤經墨
一 板やのけ〳〵ゝ〳〵もやつもあつり 親
の者ゝいとゝゝりゝ〳〵ゆくゝ〳〵ゝ〳〵
ゝ〳〵者とはくゝ〳〵絵
一ゝゝりゆよ絵とゝて絵の外絵
あるべ〳〵 一 わいやけのゝゝき
ゆゝり 近清方將く

一冊 たゝゝ一ゝゝゝ

夏はのよ　笑をちくべ　行海さん
一　ちちあわれく
もあはれ　王氏の　ほく人月ある
ちり　畢竟　ほく人月ある
一　おりてくべ　ほく人月ある
ちちくれあるこ
一　ちちくれあるこ
ぐさ　ゆかし　紫
一　おもほ　おほれ　同心　や　弁
一　ちくこの　松葉の　言い　ゆ　心
なり　八　言い　ゆ　心
めべ　松葉の　言　ゆ
一　おひくるげ　服　の　人　づ
草草　ちくこの　美　名　教　あ　を
ひあるとひこ　こも　門　も

節　女の　嫁　ぐ　ち　ゆ　ち　ち　鬼
一　おそ　ち　ち　ち　ち
一　おけ　ち　ち　ち　ち　ち　ち
ち　ち　ち　心　ち　ち　ち　ち
と　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
の　ち
ゆ　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
一　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
一　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
と　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
中　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
一　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
一　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

進食日本記 神功皇后紀北到火前国松浦縣而進食於玉島里小河之側 但此狩世俗云鮎釣也

一たいや　鮎釣しあり心く

一たぞさ　かそろーさく

一おしぼーど　そゆや同じ

ありそろーさ心れ

一ねぼーさ　おろこ　ものとにくし

一　おとーげのそと

さらのやを

ろ道のあ　きなり

一ぢぢ　其人の祈をゆつけくさ面よ

くしも　ぢ法よりまく上鶴のけさ

みぐなさ面ぐらあくずあく

一ねぐろべさ　ね中まて生長あり

おそろくあ　とけげんや思ろく

一ちをひさげ　進　遊

一ちをまやくひけん　伊勢物語に悪

口ろしてくろり　説云小松帝東行和

三年八月武徳殿の相撲あり鬼食今

是則大性く　一ちーこのくく日本記

異蒙　一冊をまべー　み

一ねされぐ　第

一ものもちに　法華

ちやハ　ひまよハ行のくもあすぐさ

ろり

言く

紐云　又菩薩摩訶薩不蓮花女人

身取能生欲想相而為記法云く

若為女人説法不変齒矣不現自

臆乃至如法行不親身況復餘多

一ねぼーれあろ　餐のすそのくくし

ある　一冊　ねぼーさの　出家

いそそ上のひまくひ　ものぐも　ろ　紙ホ

一とりてうの
一夏のくさ　紙布あやつりあるし
一をのあ　をろかなるえく
一たいらく　老く
一をいこれいゆして　あらくこころのあるく
一をのう　已ホ　一たきあり川　奥中
川又奥へも川ろ処く
一たり　侍者（サモト）女とも或は許
一たとゑび　性（ヲヒ）なく
一をくゑひ　高なしく
一たかい者　大ゑ　ひろ性く
一をのれ　をくれひ也けり
一たいまりく　紙布く
一たおりんとゑ　ぬけとゑ　ぬけとゑ
ゑぬけやゑ　ぬけとゑ　ぬけとゑ
ゑりてゑむつゑ

一たりへ　贄（ニエ）　古今ゆべとゑ大学（ダイガク）
舎（モノ）夏く　行もゆゑ心
一たひれ　老枯（オイカレ）　紙角（カミヅノ）より園（アナ）梨の
ゑゑを老ゑれあるこゑあり
一たはゑゑあゑ　りけゑく
一大ゑけゑき　ちたりゑ心
一をちゑゑり　百（モモ）ふへし反
一たはゑけゑゑ　不（ヲ）ザ孫（ナラ）

わ

一りなく　河（カワ）　日本記（ナホンキ）ゑゑ破（ワリ）
一りゑく　紙布（カミヒネク）く
一りさゑれ　りゑり　虎（トラ）ゑく
一りゑのゑきき　りゑう我ゑそいあ
ゑゑゑゑゑ心く　一りざ　鄭（ヒル）く
一りゑん　伊弉（イザ）諾　伊弉（イザ）　冊（ナミ）ゑるの以時
令（ヒル）出張（ヒロ）ゑ　諸（モロ）樂（キク）ゑの花（サク）ゑり

玉に宝く。あつさ厚。あけまでくも云
なり。時も明記云。初はハ元ハ已云
張とり。並ヒキラテ並くく用ひて。海よりとう
ひくあつとく

一わつらひ　所の早下く
一わつらいやみ　鹿病　病ヤミ　月之世俗よを
うりこみつるそくあり

一わんうり　王家子等倫王孫
て。姓と不賜　平人く

一わ方へいよくうり　余幽まうりあつ時
体見とる　薩摩

一わきりれい　幼者形不敵老者躰
す。温悲端子　寒気併入鼻中辛
とうをゆてのあつ

一われのけくし　けり濁河海岩
鳥　奉　暨　御門苔よ入あつ格

つて。訣王の顔よさ〜絵しして。京の方
よとも寸き絵ゐて。作りあつと云
一わさうでゐよこのべく。ねばやけよ
いつ〜まつ〜びして。浮〜系舎しい
くれていしの心く。岳　難岳ロろくのか
くへむありくとといこ〜とのとと云へ
たのれ〜ぐ。敢仕の表をりて。源岳の
〜とーなぐ。つ〜ふ〜ふ〜ふ

一ワラハ[illegible]とゝ[illegible]と[illegible]と[illegible]と

万やうそくく紫よりてるるいて緑
略こ云哥とゝゝしてゆうゝゝゝり

一わうゝ　第髮く

一ゝゝ　ふく　皇蘆平調

一ゝゝ　四月天気和豆

一ゝてきさきゝ

清緑掘陰合汁提平　白氏文集

一わらゝに　よこやくゝ心　和のゝく

一ゝやとの　為のちみさい　ゆりの心

いゝり　哥のゝうゝとゝ　大文れ変行

一ゝ　九四ゝり　絵　変の為日の日く　家

御多ゝく源氏の　ゝ　と　義　葉　ゝて

秋法く　十二種　勤　菓　七種の若菜

河海奏

一ゝ　葉　ゝ

の哥ゝい海を　親　ゝて　ゝ　絵

しわなれいく　ゝく　ゝり　小れく　ゆる

ゝりけれ　ゝれ　ゝ

一ゝれのあつとの　義義

一ゝけゝて　王九　ゝく　手孫

ゝ　神　ゝあれ　ゝゝり

一我之の外　二ゝ　生外の心く

一ゝ　ゝゝ　音を　ゝ　ゝ

てらけゆゝ　ゝ　ゝの　ゝまで　ゝさ

ゝとゝめ　ゝ　ゝ　神　ゝ　ゝ

ゝゝべ

一ゝけゆゝ　ゝ

ゝゝ　ゝの　ゝ　ゝつけ　ゝ　ゝ

ゝこ　ゝ　ゝとゝけ　ゝ　ゝ

一ゝこ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　菊の　ゝ

ゝあて　ゝこ　ゝの　ゝこ　ゝ　ゝ

てきくのゝれ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　撰

秋下哥　詞　ゝ　ゝ　ゝ

一ゝ　ゝ　武　ゝ　ゝ

一ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蓋へ　蟹女　ゝ　若

[illegible]

一ワ[illegible]これ 仰まて[illegible]と[illegible]てぐ[illegible]用

一ワ[illegible]のこ[illegible]ろこ嫁娶まていけし

てとの心なり　一ワ多の[illegible]根

[illegible]あ[illegible]り　一忘[illegible]

小堂栽萱[illegible]納忘憂

一ワ[illegible]　会の[illegible]なり　桃飯

一ワ[illegible]　あつま琴[illegible]と[illegible]

[illegible]せあり　[illegible]と[illegible]

一ワ[illegible]むぞん　唯識論曰　[illegible]何[illegible]

慙不顧自法　性拒男善為性能

障礙熱生長悪行為業河[illegible]慚

[illegible]作戎戦愧　一ワ[illegible]

[illegible]あ[illegible]　[illegible]

一ワ[illegible]　[illegible]

一つけ[illegible]　[illegible]

一ワ[illegible]　虚偽　[illegible]

一文衣　か　[illegible]

[illegible]　[illegible]

一カ[illegible]　乙御[illegible]

[illegible]月御[illegible]

一カ[illegible]　[illegible]

[illegible]　又冊　一カ[illegible]

可畏[illegible]日本記　恐[illegible]

[illegible]　一カ[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]の心[illegible]

も　禁中[illegible]

[illegible]と[illegible]

一カ[illegible]

ありがたきれあるゆゑ

一かくして　源氏

一かさゝゝよ　頓

一かゞしゝかこはけゞしゝ　多子

ゝゝゝべゝゝ　撰ちゝいをくもゝゝゝ　誰

ゝゝゝ心なり　ザ　変いさゝゝゝ心

一かゝゝみ　河　記念　楚仙　信　文集

一かゝゝゝゝゝゝ　文　衣のゝゝゝに　ゝさ

人よ　送りあれ　と　あ　又　ゝのもとて

のこしたゝ　風　ゝさをゝり

一かんざし　金　釵

一かゝゝゝゝゝ　ゝ　風情

一かんゝゝ　勤　ゝゝゝゝ　円　ゝゝゝ

ゝゝゝゝ　後べし

一かゝゝゝくひの文　一条院の北殿上東

内院のれへ内あり　荷葉よゆもし

とゝくゝとゝゝり　業花　ゝよあり　当代の

ゝもゝゝゝ　変ひ　ゝゝよ

一かゝゝゝゝ　後ゝ　ゝれども　ゝよ

ゝゝゝかゝゝ　云ゝゝゝゝゝ

ゝこのゝゝゝゝ　光源氏　ゝゝゝ

ゝ　風俗　ゝゝゝ　ゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝ　一巻

序ゝ

一かゝゝこと　頓

一かゝゝこと　片方　片彦

一かゝゝゝゝゝゝ

一かゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝ

一かゝゝゝゝ　上の上ゝいゝゝ

一かれゝ　ゝゝれゝゝ

一かゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝ

一かゝゝゝゝゝゝゝ

一かたらして　一かれあらこと　た
ぬすまぬ　色ぬすびとあるべし
一ひとり　欄手　おぐしぬけたり
一ひかりなし　ぬけはのあ首ぬ　ぬけをて
ぬすまぬ　くらし　中川のみちよは
とし　法ふさるり　はは　高もくきこ
えはりそのあ　美濃　伊勢　国
のはちひよあるる　ふくそのあ
あるくそりえれい　幕あをあくあ
やまく　迎くこれば　それよ　ぬるあ
ものー　ぬいなる　高よ　ふとはえて
あくあるり　幕あらいあの　高ノ
姫　名集
格のあわくえて　はくあのと
とぬりくりあ　ぬりあくでなき
一かいまと　垣ら見　おこしにあよ

えるるるとういまとしいるり
一かい　且くくとあるもあり　一かどいきとみの
るべ　一かさ　ぬるとき門とあげあるーいる　ふ家
なるとき門とあげあるーいる　ふ家
のあるり　一かさ　ぬるとき　ぬどい
して中門のうぎあるべ
一わさかなるとどよ　片帆　真帆
いの　ぬりいぬくあるせ　くれいあま
変あり　一わづきの　赤　大
ユどきーてづきの　赤　ぬ
樹　とりけ　法ふ　赤　ぬ
一かべの　中わきりくし　光　毛　詰七月篇
六八年　年　九月　在戸　十月　蟻　蜂
我　家下　一かこりん　田あり
くやら　ぬん　一かぬ　弾　ぬりくま
ぬるよ　ぬるあり

一神祥　九月ハ朔日より四裏の邪
ゆへ三十ケ日の穢よみのよし
紫門叶毋ごさとり
一かつり結る　うりけ　うるぎつ
ゆ　それ　りといつるり　よくあり
ゆとうりけるあしいみ処もあるべし
一かぎり　かぎるハ　高言教の　施花の
力や
一　海龍王の
給王の表　いと　いとん　勿論
むし　大番王と云王　ちつし
きゆをわ　りけるを　国の王
ゆそを　のそけ
ほどに　ゆ　ちの
なし　ひり　ゆ
よあり　て世七百八る　百里をる
つ　ゆ　ゆ　の王

て　古海のそこ　ゆをけ　てゆて
ゆの王　ひよ　竜国の王人の表
よ約　ひ　のくとりうし　ゆる
ま　吉祥天女の　より行り　ゆ
勝　龍王　の八葉の　ゆ　ゆも王
れ表　れ　ゆ　ゆ　ゆ
くり
それる　ゆ
とそ　ゆ　ゆ
いり
ゆて　ゆ
めるく　ゆき結　ゆのあく
ゆさ　ゆいうん
みあ　ゆ　ゆ
ゆり
し　古海の　ゆ　ゆ

すさいさのきこえも心いさましき事
びて侍りあるとの由なり
一かのすこしあんぐよ　昔の尼君よ
源氏のゆるすと心ばせよのゝもてなし
紙のくりのひゝきを　源のかゝ樂をして
一かのもろ琴を　源のかゝ樂をしてはゝ
ふ尼君れうしをいとできゝ給へるに
尼君のふまんしのもの
一かの色ゝ給ひよろん　雲の中なる
一かゝやゝかゝとかゝ
一かびすゝ　源氏のさひゝの物
のゝくゝさゝびすゝ　ゝゝびすゝ
十月　ゝゝるつきゝ　花
かりゝゝすゝ　花　四裏ゝりゝと
をよ遁あの時ゝりきめ深あ
れしいづくゝそ　袈裟あゝ

目や不士　京十月

め給へり　一かゝつゝて　ゝて
すにゝわけゝゝいつゝよりてゝよつき
ゝゝどゝろんゝゝゝりゝどゝひゝゝ
にをゝどゝくゝあいゝゝあゝといゝるゝゝ
つゝゝて　おいゝゝわゝゝゝ　八樽ゝの海濱
の時　修義者　ゝれゝといへゝ　威儀師　磐
をゝゝるゝゝ　ゝゝ海濱ゝゝ
ゝゝゝも通ゝゝゝ
かゝゝもひゝゝく　ゝゝゝゝ
給へゝ　一　一かゝのゝゝ
をゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝ　法師　ゝのゝ
かゝゝて　人ゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝし　あゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ　一　一
主天中天　迦陵頻伽　聲　法華經

迦陵嬪伽在壱勝衆鳥ニ云ク或ハ加護
賓或云ク 伽陵嬪者梵語也 迦陵ク
ハいこの中ハ〻ちりゝ〻あり
一弗ゆ〻ゆめでつゞき 大隆寺いこ
ゞ〻ゆ〻こゝ〻ゆ〻ゆて同寺迦陵の
井の別当よ。富小路の内白つゞの法橋
の親主の七家して。葬すいさ世法
つりし。はぐくりのるゝそるゝゆし
う。方人〻ゆ〻あれぬゝいゆ〻ゞき
はゝ〻ちひろゝやゝよゝしゝくゝ
ものしゝゞ。ふの邪めゞゞこゝりを
てけゝ

一かいまろ墓を

法のゆ〻よ立伽くゝて十人のいゝゝ秋
昭代ゝ数寺固ゝ
ゝの紅法ゆよ云。て十人の内有二人
破二人 法代三十六人ゝゝ。はゝ物語

りのゝゝゆをいつゝ。ゆゝもよせるゝさ
のゝゝ輪墓の橋作して。葬墓のゝ
よ旭立ゝゞゝのゝ

一かゝゝのゝみゞ葬のゝゞゝよ。ゆに
の立木の枝ゝゝともゝゝゝ。ゝりゝ遠ゝあゝゆをあれいゝ
ゝゝ寺のりゝみゝゝゝゝゝ

一りんあゝりゝゝゝゝゝ これ寺をす
ひとゝいつり

別よゝゝゝゝゝ

の女房たちの紙、宋天のゆきしるしとて
ちり、又文をば卓文君、白頭吟とて
をつくりてあれば、可ゝる相如をば
てあれとひろうるに
一かくれなきものとしき心とぞ濃き
心とぞ
一かくれなきものとしき心とぞ濃き
いとぎぬ花笠のそんよいれ袋とりて
第宋なり。但天暦三年三月十日二
条院花宴陽成院夏同月十二日内裏
行幸殿花宴各有業平即業春
鶯囀又世下伶人とりて度々の
業いなさま　げ物法のおもしろ面白
もあれば、あるべきあるべきあるべ
あるべ
一かしもえ
らん　傳作之遠遠なるべき毎日よ
感じてこそ通しのこそこそ

つるに
一かくてこそ
為法ぎの心ちにこそ
一かくてこそ
こもこそこそ。こぎこそ上臈のさるこそ。
行幸、衣のこよ美ひろ物
一かけ　豪家也けんこんぎりひるとき
ひのり
一かりれとびんこ
夜ぶのそこなぎのすれ夜　花ぎす
年の雑義なり。法師ものも怪るひ
ひこりれどいこんこいの一負こを
名なく。四陽の物監将曹家を
一人はこりそめにこりてつこ
人とこのり職よりて法勇とこ
つこりぶりありて。法のあひこの
けめぶりや。ここみぬよこそこ
く一人つかりこそこの法多

とつかのり。假令術士のわざ下ハ花
実だちたの番長一人を清よくすて
ちくの法多をゆるされくゆーぐどろ
かりそのくへよ釋かるあどのはい移盥
お曹府生とみ一人はく奥すると鼠
ちもりの法多ともさく行もとあ柴
のちもくく蔵人のちくちら蔵上の蔵
人の羽盥といのそれと鼠よぐどろ
すい。例かさるくみ行者のはいたん
を清盥曹ハかい陣よ仕をしくるよ。
りくくーの下負よりーまくくるもう
あるあるるくば一般の行んはくさき寸別
ふるを記すべし乗屋傳云ハ敷依乃寓云の
拝と宗ぐー源氏方ねとりんみにせ
ちくあるぐー極蓋ぐ伝一りくさあろ
つかるあ一盥とりくー冊かくーけりのぞ

少弟八十銭ぐくとい。あまされくよあいあるく
をくー法結つり後擢弟。蓋義赤生
日あるくくちくよ似くりり長利よる
一かぐ遺骨のくく
一かくーごめくくく髮上の時沈いぐの意
一かりくちくー沈くくちくあく
一かんづくさ沈可くく
一かくくうくさい ちくくーの杉とい弱法あるき
ちくくーのくさくくのはの
一かくくバーあくれくくく 無文辨行せん
日い。あばくあくて それ漢のくのあり幅の色よ
て中法れ解とすくくのあく
一かけ海くもうくくきあくよとて
宣命の何 制畏
一かものくりくくよくくんロれの法上
孫王。そくくーやくーべー 孫王 為

欽定例集の内親王　又徳綠王中務卿
仁和五年ト定　惟彦親王五
くもあるばりけりと云　仍如
一所　かけまくも　移香を
ゆるゝ心あり　あさかれ
どあれば
かつあらぬ　ぜ
一かへさへ　婷
うぐ　泥　拜　朝　拜　せ
天雅彦門之湯津楓樹　日良本記
一　かつのまの
一　かつらの　河　楚　駒原　くれ
爰といふ　低　駒　ふ
一かたりの　し　河　緣直衣　絡
とり　候　絶　ときあ　結　絶
平絡の　く白　製の
絡あり
一かんの
弟　ふ　ば　仕

鴈　鴨　と　て　河
あ　く　り　ら　け
一かりつね　ひ　つ　ま　づ　き　あ
あり　或　海　津　ま　し　ろ　弟　貝　な
ろ　し　秘　国　ろ　ま　よ　の　を
び　あ　と　云
へあ　胡　馬　朝　ゆ　風　越　鳥　巣　南　枝
馬　ま　胡　の　熟　仍　ゆ　あ
ま　び　日　星　と　き　し　く　い　ま　く
か　れ　と　つ　ま　光　廣　凌　散　八　琴　を
秘曲　秘　康　り　華　陽　の　き　て　秘
人　よ　あ　ひ　く　け　く　ま　る　き　り　び　秘
い　き　の　冷　悔　の　後　け　く
一　か　と　の　け　の　行　た　内　云　識　負　金　大
紐　云　二　人　き　く　今　の　文　乃　く　か　く

二人のあいだもとりあへぬれば後のあを
くらべさき宮本に遂誠の心も三人共に
ちよう侍従あくまさ心さくさまれ宮
のあとをばいづまも侍のそのとをくるみ
にもりて源氏も侍たちかをいとれ
ゆまりあかけ西工人侍士人よりかり
一かつらはよりけく送りの人はかり
一かくしとづく十列ら東宮の殿人十
人てまのりてあとをもいつあさ
く神社の行幸園白の和歌を書
侍てをくを眞して社ゆまして馬をくた
と舞をくそは馬ゆまして馬をくた
そりありそのけよりいたは近の宮人
をとつをす八幡臨時祭をどらを
上の殿をを舞人くより源氏の宮
侍長海してをも系人十列を眞し

侍つるべ一かつるのおくのは
まいとまびく花も徳二年八月九
日堂薗于東左大臣禅左右と同日
童六人為随分三年十月九月
賜たり迎清存生各二人を清各三人
為侍男俊僧童をあつ今集ワ
いはあ三つゆして女されすてご
ろもいはあ三つゆしいろすいえあれどそ
の装束れを面白えなす水干あべ
やりさあくあるべーや侍男とんで
ちやあぐいををべさをやはもは
をあの花をとをるしは堂薗六人
とをくあり宮のいた十人あり又
鞠公童侍男侍男国史をくもえ
ををびされども装束を詩をあ宮も
ありべし此和漢よ吉良郎侍をる

べ　一ほゝ扇

とど　唐寺・藍姑射山・いつまでもあるべき

一かさつんうるのく　とりはんの方のき

なり・はけかゆの石ぬれ巻の巻く

一かんやどにうのさ紙ぐいして　畔

ぐいして弾あるく・紙屋のく・紙

すさおひとりうりぐりぬさい唐綿く

うのうしねし　一かこ高いうぐりあり

て・紙をはぐて・ちれぎきぬのやく

もなくうけうぐ・ぐうてこ・首い・

参ちーや・上の・切よ中・納言もこ

ぬとこ・ず・はは世ぬいあ・ぬもーろ

き・紙屋をこのみ・あれぐこ高い

こき・度乃ゆ高をこめや・撰遠寺九羽

云・慶・紙屋ぬ・紙高ひげ・添

ありくと・高ぐこ・一おこうあり　信よかご

一かつ〜よころべさうあると　畔　清滅の

堂あく・信を・大・四圍あり

や・又・桂・流・源氏の・大やーよつ〜の・信よ

や　一かりのはぞ　ひよ

うてのは・裏・朱と・今云・弟・信ぬ・衣

裏く　一かじあぐとぐよ

牛ぬよ云・柯・子・先毒云〜

一かぐひろけさせ・信ひて　畔　秋好のさ

いこいうて・源氏の工門も　盤・昌を

んはと　一　祇さびよびつ年

月のら〜・源の久〜き・紫・紫の・ゆと

云・祇・閑・又・祇・宿・上久・ちつうるゆ・又

久・変ぬく

清・きうれ・信・桃・墨・実ぬの・義はり

てゝり

よい　雪のあるり　一　かきつらく　雪も

一かつらの下風　祭の風　一　かけさやい　うけ

とゝ　きやいとい　とひけさやいとく　かもゝ

のは　複　ていゝて　除夜のこゝとき

んとゝや　歌　閑りとくゝり

一風のちゝけゝす　文選

豪士賦序　落葉　俟　微風　以隋而風

力蓋寡風の力　内方長　心中須　饗

をゝいゝ不成とゝや　今ハあるかゝしゝも

源氏のちゝけゝ　きゝて　立心なゝび

ゝけんゝ不成とゝり

一風の音の行よ　風生　竹　夜窓間臥

月照　特　掌上行　朝

かけていゝゝけゝゝ

ゝり　雜　のゝづゝと　月りけとゝり

月りけのいとゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

神よりけゝも　源よ　ゝ　ゝ

ゝり

一かいりよきゝ

ゝゝて　河　擣練　紅のゝひゝき

ゝいりのゝひきめ　着てゝいゝき

堀暑ゝり　花　擣練ハゝすゝ　紅の

きゝのゝりゝとゝ　ゝゝを　ゝ中び

ゝゝふ神とゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

ゝゝ　ゝゝ　着ゝゝ

一かゝれとゝゝ

きのゝゝきゝ　唐東京　錦　日

本ゝも　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　花　今

業　白地　と　東京　ゝ　ゝ

一かゝゝのゝちゝゝ　ゝ　ゝ

ゝゝゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ

必着べきものいふきぬぎあすこゝなる
ものなり　一かりそめ新森の祖
くもと祈なり　一かりごしの世くる
まてくる花今業云るゆゑの冠ハこゝを
るくまてくるなり。ゆさ結て花をとる。
義人不ゆり見をとゝ結ふ。古伝説
人のうちまをを着し。かゝこしさう和
い。後のありてとゝくゝゝゝゝゝゝゝ。
きよりてるれぬすぐるるるにすりく世
ぐるれあるくいいつり
一風ふけば波の音さんを　蜻蛉日記云。
ゐるよをりて帰とて。いぐさんを歌
の後ひて云ものをゐりてあゝ中
もりこさ結ぐ
名ぬめべ　一かめれうのこと
不見逢来不敢飯童男童女舟中に

老文集
春ふ呂ゝ。及音ハ呂ゝ。一かりこゝる喜
之。喜喜ふい。黄陸調の音。平調よ
もりて。ゐるゝ。ゐ。で宮。他黄陸
律ゝ。拝ゝ。名律の呂ゝ
や。呂律沿牙　一かゝりゝふ結
つり　ぎさにわぬ神
一かへゝやく　大日をゝ
一風乃音ゐよりぬく　秋風ふのゝ
平調。次。沿盤。ゝあり
一かゝさゝゝ　ゝぐ橘花のゝ行ゝ
文繁なる音や。古今よりの橘をあ
つゝ。ゝゝ　一かゝさいゝゝあ
ゝ雪ゝゝ日本記才云。天照太神踏
堅庭而隠殿岩沫雪改鹽散　今業
うゝさ出ゝ庭やゝあゝぐさ言のゝ。そ

さのとれこゝろの悪行と天照大神の
いかり給つる時ゆるしたのまつ給し
給て いさゆひとやし給ひの事や
今をかぎりと云事なれども
心ゑのつゝしみあらはすとゝきくいつる
ゆゑ
一かりのくしき
一かりんの表 門侍番
よりより給ふ 高よ神くゝる 面善のる
一哥 一かりのゆゑいとひや 雑歌
うゝあつべし
との給ふ
九月 とゝ世 世俗の慣 十月 よい内
まつりとけ ぐめ れ あ ま ど 九月ぐ
うりよ命をとゝ いつり
一かりの衆いとざ 家神
合の男 ひけ川 とりこと
源あ とゝ とゝ ひ あ ふ ふ れ

ゝも八幡宮乃宮あり
一かりのゝ 文ゝ云形斗く
一かりみの 聞ゝ とゝ とゝ 五色
掛ゑ
の葉 花葉文
八幡宮
花 月花とゝ最つゝしい島も
一かりんのゝ 俗名 ぼん 行はぬ 何
人 花 往古の和語 方葉
本記の歌の格く 一かりけく ほゝゑ
ゝ 遺迹 けゝさく 匂ゝ
一かさゝても 梅ひとゝ
桂 生 章 ゝ
ゝ 梅 嵐山 玉 ゝ
課 武 教 方 之 変 風

紫の風く博士よりくめるや
一神無月の廿日あまりのほどに地震
ふる行幸あり　康保二年十月廿三
日村上天皇行幸朱雀院に御覧とて
ぬしてきり
朱雀院よあり漢武帝柏梁殿に
くじくるを東文は如く
一かくしのざい　つくり花をとりて基
一かくさくり　舞
よすあるく　一　賀皇恩河　延喜
くあり
六年同十六年は賀皇恩
万歳樂あるすは紀よくくろく
ゑ
一かくものばくりを云心や
一かくらくら　舞ちくゆれねさね　そわくども
よみくひるく　一　かけ和も　勝負

のりけあるり
九条　摂政関白社　一　賀茂石清水勝
一かくさぬきて　くくさめくくを云帝のを
一かんざくく　神寶
一かくさくくあるね　おの系一つくり引
て　ゑそくをはくちるれとのを
一かくしひくくさくめもくくびよくり
琴の法よくり　宮よあづり　世よゆく
くくびひおやくくあり
一かくくく　くあり　緩急　けくよ　泊を
なおけくくを心を
一かくくはよ　紫宮の神とい右衛門
の変とをり　無白　柏　よ　紫　九神
とくくはくもり　別　俗　あり
一かくのくりんのくくい　唐　緩　泊を

小紙
諸説
あつび
面として長月ひと作物おりまし
世長月あり 素流の汁まや 中ぎ
宿代なり 紙 熱ぬの中ぎ 古紙
仕の者 治りまし
一かいぶし うて給あり
一ぶさ みさめべさ あやまし
一かさまへ 縮 舟 ハ 切者 すう
一かさあり て 和と 早 よいあ
あさうなさあり く 強く
一かつれげよ ぶるよいあびや 益
人おね 流よて い 刻よ ハ ぶ
げよ づる れ し と し
ひげ 思の 姫 の 蓋 中 手 多

しゆつあり 一かんるのふ ここ
うなざあど あのの と
一かんとつく 醉 醉 ハ たの
舟の糸 其例 村上 記憶
和元年 国三月十日 墓舟 糸 養ス
醉醉 糸 葬 宝 又 河水 樂 云
設 一所かさまある うさ
しあるとら仰も ろの あ
志 花乃 沼 と ひ ふ
一かせうして 風 ふ
一かづひげ 髮 髭 おもげ ひげ
一かぐと 法 れ 長 あ ぐ
てと 力 一 長 の 度 也
一かまき あ ま 除 抜
一かべの中乃 壁 の
結 と 遺 壁 暗 蕎 限 思 意

一かいせんらく 海賊 水魚の楽
一冊かさくり 月明月蔭のごとく
くくりのこ ふごりのれば月びもひ
めくく
一かくの町 二丁町 勤番
一かがやぐ うつり海きの
一冊かい島 姉川 似くろくいとさ
ものやうく似くる身くく 色 あ
ふくく地方とのの
一かくぎんをし 庚申
一かくよりがくん 中 考 ぬ
うき舟のやうがくんとこ
ぐく
一かくおとりみ
うり猿のまくも
一かけくる うれやくくゆく

若有人受是彩王
能敬天
者是人敬
賛者是人敬
者是人敬
者是人敬

一風のまぎれ　地獄のかりはと明の
ざれとゝ　一かれとゝ不雑く
一かくさゝ　芋生　一かゝし　大やけの
神の島　一かぞゝそげよ器
ほもあさあげつべさ　文選　朱玉風
賦曰璧石伐木　掛殺林芽